

135
15
116

東 京 圖 書 館				
一 五 冊	二 六 號	三 架	四 五 函	五 雜 史 類
和 書 門				

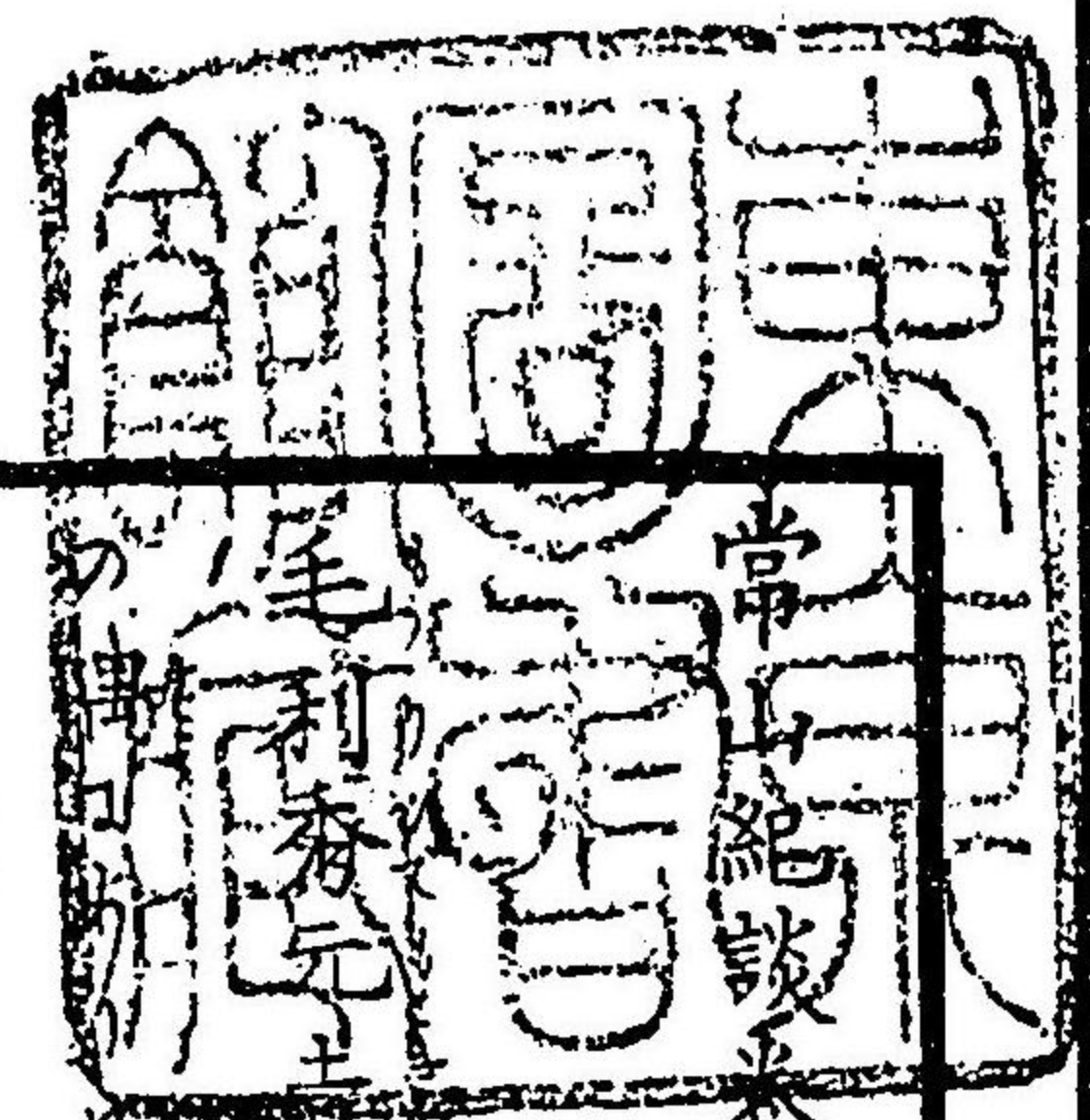
常山紀談

十五美

常山紀談卷之十五目次

- 一 伊勢國阿濃津城軍の事 附佐治縫殿之事
- 一 長束大藏大輔降参之事
- 一 渡邊才兵衛武功の事
- 一 石田三成生捕る事
- 一 小幡助六郎忠死の事
- 一 河村權七郎之事
- 一 加藤清正の北方大坂を忍び出られし事
- 一 淺井騨合戦前田丹羽の將士功名の事 附松平久兵衛軍學鍛煉の事
- 一 山田勘六郎討死の事

- 一 黒田如水凶相の馬不乗き事
- 一 黒田大友石垣原合戦の事
- 一 三宅喜藏武勇の事
- 一 肥後國宇土城攻杉本次郎介夜討の事
- 一 福嶋家の士大将東照宮を拜する事
- 一 加藤清正治亂を論ぜし事
- 一 黒田如水豪氣の事



常山紀談卷之十五

備前國 湯淺新兵衛元禎輯録

利権元主 川廣家富田信高の阿濃津の城を攻る時城兵城の乾
 の陣に於ては 伽藍を焼拂ふ所は 俄に風かきりて 焔を城に吹か
 くる 守手是を乗じていざ打破んとて 突戸備前守隆家先りけり
 て攻入りしを分部左京亮政壽城中に 加勢有りしが 切て出突
 戸と戦ひ互に 痛手負り信高本丸の 大手にすみ出槍を合はせ
 と相戦ふ所の 容顔美しき 武者緋おどりの 物具中二段
 黒革をておどりを 着槍を提来り 富田が 矢面は 立ちあがり
 支へ戦ひし 秀元の 兵中川清左衛門と かくく 富田門に入る 時の 武者
 を見れば 殿ハ 恙なく ころせ 給あり 討死と 聞え 形ハ 女ありと

も男はおとるべきやとて出候ひしとゆふを聞か信高の北け方
なり信高の北け方ハ信高驚きとて且悦び打連く城に入り今日の有
様守りしひまきまきなりと云ふあり其後高野の木食上人和平を取計
ひ信高城を出るる程なく東照宮伊豫の宇和島より十萬石
下賜はりなり

佐治縫殿ハ近江甲賀郡伊佐野村の人より父を左京としふ
秀吉の爲に城を落さば流落して縫殿九々の歳富田信高は仕
へ十四まで四百石ありとらまはり津の城に籠る時十六歳名
を善太夫と云なり八月廿四日京口清嵐寺の三ヶ丸焼拂ひ
敵攻入るるを防ぎ戦ひて信高本丸に引取らば分部左
京亮といまぎ来らば家老物主も来らざれば信高天守は上

も自害せんとして物具を脱佐治は汝介錯せよと下知せしれを
ねし留るる處は分部富田五郎右衛門同主殿上田吉之允も
二の丸に引退く体見えぬは信高上帯ちめ直し佐治を天
守より使ふやとせり大手の門矢倉廣間の前屏重門の左
て毛利秀元の士紫あちわけると其外五六人と上田吉之允槍
まで渡り合居る處は行懸り詞をかけて敵を追せしはる
くけさる敵大手の門くぐり引退くを追つめ兩人まで討取てる
を信高天守より見らまはり後城にこもりしきし時着らまはり
甲冑と白河原毛なる馬小鞍といはる作の鞍鐙を添て佐
治小與へらる其あけは年佐治富田は家を出て筑前中納言
秀秋は仕へ其家滅びし黒田の家は仕へしを富田禁錮せし

きく大坂陣は後藤よおねを遣はして士三十騎の將となり五月六日道明寺の軍に寄手は物色を見んとて谷川をちぎり出る處東より来る物見武者を行逢ひ即討取て首首を得たり是後藤の手の一番首なり後藤が旗本敗北し敵におし隔らま丸山の北細暇みと返し合せ敵一人討取首を添分捕しきくとも首をも棄けり敵慕ひ来りしに大坂へ引取事叶ふまじ討死せんとくかけ出りを伴野次左衛門佐竹安太夫本多小右衛門もつぎて槍を合せんとするふ深田もく敵かり兼り伴野しは是までよとて佐沼をとと引返し道明侍と平野の間より真田も行あひと遁き得たり其後流落し仕へを求め貧しくして江戸柳原の町家ゆら少をかりの所を

○

かりて妻と二人有りけるが京都に赴く妻殊にあまきふる体ありしを近隣の者ども心を付めていをり日を送るし小いのなる事みく京にハのさしぞと問ふ池田の御家新太郎少將の祿千石賜らんとその事なきども二千石あるは奉公まへしとく其のめ小京へ行かうと答るを聞きて千石むご異名にあらざりたりか程なく従者十人むりり引具し馬に乗こきりやかふる七来りて吾ハ佐沼なりとて妻を迎へ近隣の者もそれみ土産し妻を心付ける禮を述て池田の家へ仕ふとて去り関ヶ原の軍敗れしは長東大藏大輔正家江州水口の城へ引こもりしを國清公船戸帶刀を使ひて降参を勧めらる船戸是ハ物をまてる人然るべしと辞し申ひまきども汝とく行

向へよと仰らきし船戸方三四寸計の小き錢の板を造
らせふとあるふ入る水口は行長東に逢降参あり士卒も
別の事候まじ此旨よく申せと申なりといふは長東阿濃
津の城攻して関ヶ原ふさせる軍もせで口惜く候はらむ
此城を枕みせんと手の者ども存る處なり然る小降参せん
ハ耻辱にて候とどぞ船戸長東があくの士を呼ぶ懐より
錢の板取出し焼て給う候へ三左衛門尉が詞今かく申
所偽あり印は錢火をとりて見せ申さんとして思ひ切らる
体げもいつそをさざりしは長東感してきとて多むか
れてどのよあらんも力を汝が志もさざりて降
参せんまらふ候是ハ見苦しき物候とてまぬらむとく



貞宗の脇指を何之なり船戸尚座を立ざりしは長東小
性をよんで現取出し降参まきし書て船戸も何之なりは
船戸歸り長東城を出りて警固の兵を入らまらむ
佐和山の城をかこむ時堀尾信濃守通晴渡邊喜兵衛を呼
ぶ九城を攻むる敵の虚實土地の要害具は知らずハ叶ふまじ
いうめをて生捕をせむや汝事よくせんや言まれば渡邊首
を取らふ易らき候まして生捕せん事叶ひがと申しも
てぬ小渡邊が弟才兵衛進出殿の仰も何とてさハの給ひ
候ぞ喜兵衛年老より軍令を司るは然るべしかゝる力業ハ才
兵衛は仰付らまきよとハ喜兵衛思慮あき事申そ無禮なり
といへも通晴大志壯力人の及びがらむ事をもたし得べき眼さ

一と才兵衛を稱せらるる一と才兵衛座を立りり兄の詞ハ
 禮義なり汝が詞ハ血氣なりと人々戒めりもども吾思ふ子
 細あまはくそとて夜の更るを待て従者一人打連ひそらに城
 際ふ志のびやく茂るる桑の木下みさやく者有り近くありて
 そまのぐさばいと二人槍とりとわらるを才兵衛一人ハ突伏せ一
 人ハ追ちちし首を従者より奪せ城ハ忍入り生と歸る事
 萬ふ一なり此有様を兄に語ると云く堀み深く行く所ハ
 夜廻りするとおぼしめて打過る其跡みついてゆけばふり願て
 名乗るぞ爰に待と打んといひつゝあのみより一丈計みなり
 なる時槍を取りて敵の弓弦を突切て其儘槍を取直り

諸膝ないで打伏せ上り乗かり汝よく聞けよ吾殺さんといふ
 ハあらず志うくの子細有と忍び來りし一行あひしるハ天
 の島すけなり汝死んとなふ吾汝を刺殺して自害せんを
 ハ益なり吾子随ひ來るよといふ彼士怒り既ハ斯成り上
 ハ命生んと思んやと疾刺殺されと云才兵衛聞て二人
 空しく死んより生く功あらんこそよき軍神も照覽あま
 吾儕たすよといふさらばいりもせよと云才兵衛悦んで引起
 一物具は付し塵を打拂ひはき彼士あはき汝ハ大剛の人ハ
 て志を辯舌明くなりわらめられぬと耻とハ思はる名ハ
 松田大次と云ふものありといへば才兵衛松田を先よとて始首
 を取る所ハ従者喜兵衛殿も追つて出給ふが歸ら

ねどしふ才兵衛しうは給へるや松田ハ逃へき人子あ
 らねども汝付そひ居よと云と城の方より所不喜兵衛帰
 へくるは逢生捕をてこそ候へと云城門ハ固く閉り元
 弟打つき帰してかくと申に通晴やき事をもあくる
 よとて一同ひともみあへり生捕ハしりみせんと申を東照宮心
 又住せよと仰せあり才兵衛松田子申せし詞あらくふり松田
 に腹きうせらるる臣先死罪となり候べしとて之を勇有又な
 さけ有りとて松田もあくるさきなり
 田中兵部大輔吉政石田を生捕せしむるに懇に會釋
 して數十萬の軍兵をひきあらしめし事智謀の由し事
 と申に軍の勝敗ハ天の命候ハカみ及ひくことと禮

義正一うりきまば三成打つて

三成此時坐上の楹よりかりゆきなり田兵と呼びが如く此時

も田兵と云ふ常々替らるるなり

秀頼公の御為害を除き太閤の恩を報ひ奉らんと思ひ
 運盡かくありし事何れ悔むべき是ハ太閤より賜はるる一切
 正宗の脇にありかたをなすやとて與へり

馳走の士を付くもあしきことし片時も早く死んて食せ
 ず馳走の士いうで兵部がまうひま及ぶよよくしりて最後の
 御用意候へくといひしをまはす此頃腹中の物もまはす
 炊をせまへと云く其設くすめらるる快く食して打伏す

射かきたり

田中石田を引具して大津に参りしは東照宮本多正純は石
 田を守護せしむり仰出されし正純石田に向ひて秀頼公
 年若く事の是非をあるめし。唯太平を致し道こそ有べき
 まし。今軍おこしてかく耻辱も及まじと云。三成は
 三成吾土民より國を賜ひし恩を以て人なり。世の法を
 見るに徳川殿を打亡さば終り豊臣家のためなり。と思
 ひて秀家景勝を始め同心なり。を志す。勸えく遂に
 此軍を起し。一より戦ひ。臨んで二心ある輩裏切せ。故勝
 べき軍は打ちまけぬ。こそ口惜しき。二心ある人。ななく。汝ら
 を始めかくの如く。先ん志を失ひ。運盡ぬ。は九郎
 判官も衣川も空しく。なり。吾打ちまけ。天命あり。

正純智将ハ人情を計り時勢を知りて申せ諸將の同心
 せむも知れかる。軍を起し。軍敗し。自害も
 せむ。かめらる。ハ。ハ。ハ。ハ。三成念て汝ハ武畧ハ露も知さ
 り。腹切人手。ふ。ハ。ハ。ハ。ハ。葉武者の事。頼朝公土
 肥の杉山。朽木の洞。身をひそめ。心ハよも知ら。大庭
 了。か。め。ら。る。汝ハ。嘲。ら。る。大將の道ハ。わ。る。も。汝ガ耳
 ハ。入。ら。ず。今ハ。是。まで。なり。物。も。り。

東照宮の御前へ三成を召出。て。り。武將も。あ。る。事
 む。り。有。ル。き。め。一。あり。耻。ま。あ。く。と。仰。せ。ら。る。ハ。三。成
 一。き。打。た。と。け。く。唯。天。運。の。あ。ら。う。も。る。處。も。候。と。く。

首。も。な。ら。ま。候。と。申。し。東。照。宮。三。成。ハ。さ。た。大。將。の。器。量

なりけるよ平宗盛は大に異なりと仰せ有りけるもりり又
 一説中納言秀秋石田が体を見せんとて座を立ねり細川忠
 興何ぞ益なき事ありとてども聞入り三成秀秋を見くと
 れ汝が二心あるを知ざりバ愚なりとてさきとも約またがひ義
 をまじく人を欺きく裏切らるハ武將の耻辱末に世まで
 も語を傳へて笑ふと云ふるも秀秋詞なりりり又三
 成大津より時御本陣の門外に置をき其上に坐
 して諸將打過るるが福島正則無益の亂を起して
 其有様あるとてしきき石田おのきを生とり縛らざり
 一ハ天運なりと云ふるも正則詞あり過らぬ黒田長政通
 らき馬より下して不幸をかくり給ひぬ是を

着りき羽折をぬいて着せしきりりり

石田を始小西安國寺生ども三人の肌は木綿のやぶき
 ころものを着るを東照宮聞召石田ハ日本の政務を取
 たる者なり小西も宇土の城主なり安國寺まじりやむべ
 き者あり軍敗き身は置處ある姿となるも大將
 の盛衰ハ古今は珍しく命をみどり棄ざるハ將の心と
 する慶和漢其すめ多し更し耻辱あり其も京中
 をくはは將たる者耻をある事吾耻ありと仰せ有
 て三人小袖を賜りりり石田み見すればこまハあてたるぞ
 と問ふ江戸の上様よりとてハ誰事ぞとて徳川殿と
 答ふまば三成何徳川殿を尊ぶべきとて一言の禮及ば

あき笑ひて居しうりゆと

小西ハ敵對の吾小これまでのいづく心不耻しりとて涙を落しりて安國寺ハとわくいなで赤面一俯き居しうりゆとぞ三成を誅する時車ニ載て六條河原ニ出れり石田顔色平生の如くなりしとや又石田治部ガ天下を取らんと云るを聞くと打笑ひては大軍を率て天下をけ目軍の天地やおねぎる間ハかくれあつちつとも心不まづる事おたよとやまばしともありなんといひりゆとぞ

○
小幡助六郎信世ハ上野介信繁ガ三男なり上野の人なり十五歳より大坂ニ赴き諸家の体を見り石田ハ太閤無二の電臣なきハ仕へり後祿二千石をありり関ヶ原も三成敗

北の時お一隅らま三成不従ハバそを切りぬけり三成ガ行方を尋ね江州石山ふ來りて郷民かめりて大津ニ参る百姓をバ賞せられて金二十枚を賜りぬきて信世を召出させり石田か行へをたませ給不信世兼り三成ガ士小幡助六郎と申す者不候主の在所よく知り候然まとも年比恩を請する身の今日は難をのぞん為り主の在所を申し不義や候まとも骨をひらぐるともかてく申おどやま候試し拷問何まとも申切てり東照宮聞し召し忠義の士なり三成ガ行方おめ知りふあはれとる故ふこそ落行りかめりまともこれ士不どの者を拷問し及ぶべし將する人ハ忠臣義士不便をこそ加へめやく繩をとけと仰有て則赦させ給ひり

信世近をあつりの寺は行其由はほぐと語にありはざる外も
赦を蒙りしれども亦耻みあまんも計りたり屍をかく
給はまじとく自害しるを大津に申上りまじバ殊の外を
一まじ給ひらば

○

関ヶ原の亂の時加藤嘉明の北の方大坂に在り河村權七郎
を伊豫の松前より大坂にやまらる忍びと屋敷に至り北の方に相見
松前より長臣等がかよりとく参り候若奪ひ取んとせんとも臣か
くと何んかハ危くお思し召し候ひとく屋敷の隅に井樓を
あげ柵の木を敵よむくるが如しかなむ時ハ自害をすめ臣も
御供申すと云はる小細川忠興の北の方自害の後人質を奪
ひ取事止しりり河村は二百石の祿を増與へらまじ後河村は

ひらる大坂川口の守り固く中々通ふべき様あまを尾ヶ崎の漁夫
をわらうし船に乗網の中身をもめ敵の中に入り守りハ必死を
思ひ定める事あり関ヶ原の軍は首取り者も同ドク然る
に恩賞の時事明らなぬ殿ありとて出奔しられ嘉明念く
探出して誅せむと言はるる山中なかま居り大坂の亂
起り一時嘉明江戸に残りて不慮の事あり取まをて攻殺
んとしあり其比夜更に河村嘉明の屋敷の門をたき青木佐右衛
門を呼出し青木あやしく立出見よ河村ありこゝをいある事
ぞといふ河村事ありとさやうなきど君は仕ある者の忠を致さ
ハ常の習ひなり然るも過り大坂の事ふちと殿を嘲りて出
奔しる事後悔今ま益あり十餘年山中はかく居りまじ

の事多く殿も危くおん〜と聞て夜を日ひ継つぎ参まゐり〜と
 へへ青木誠あきまのまことの義理ぎぎの志こころはさる事なきも殿のしうり甚おそろし〜とバかく
 と申まをし〜とゆゑさし〜とく歸かへらさる〜とバ河村臣かむらじも者の義ぎを知しる
 なバ河村ハなご來きら〜とゆゑさし〜とゆゑ門内かどうちま〜とゆゑ入いり〜と歸かへれ
 とハ口くちの詞ことばよ此こゝ上うへ六町屋むつちやふかく居ゐる殿の先途さきぢを見んと云
 一ひとハ青木あきまさるバ先ま申まをし〜と見んと〜内うちま入い嘉明かみふ告つぎバ〜と
 び入いり〜と〜やうて寝所ねどころふ召出よめだされ〜と一ひと目見めるよ〜涙なみだを流ながさ〜
 一ひとハ河村かむらも涙なみだみむ〜君臣きんしんさバ〜詞ことばもな〜り〜と河村かむらおもひ〜と
 殿とのの御前ごぜんふ出でる事よ今生こんじやうの思おもひ出でる候こうと申まをし嘉明かみ汝なんぢが志こころい
 せんや〜と〜と悦よろこび〜と夜明よあけて河村かむらを來きれ〜と下部しもぶまで〜と
 や〜大軍たいぐんの援有えんあり〜と如ごとく〜と嘉明かみ寵愛ちゆうあいして八千石やくせんいしあら

程ほどなく病死びやうじ〜と奥州おくしゆ四十萬石しよじゆばんいしな〜と〜時河村ときかむらふ
 加藤かとう清正せいせいの北きた方かたも大坂おほさかに在あり〜と石田いしだ人ひとあら〜と云いふを聞き
 一ひとハ清正せいせいより付つら〜と竹田たけだ善兵衛ぜんべゑ家正いえただ大木おほき土佐とさ恒持こゑぢ謀まをを
 廻まわら〜と轉法てんぽう口くちは居ゐる清正せいせいの舟奉行ふねぶぎやう梶原かぢのら助兵衛すけべゑは山やま梶かぢ
 子の煎汁せんじゆを飲のみせ四五夜よ移うつり〜と疲つかれ〜と大病人おほびやうじんのこ〜と
 一ひとハを〜と綿わた帽子ぼうしをか〜と前後ぜんごも氣きか〜と門番かどばんの前まへ〜と戸
 を〜と断つつと屋敷やしきも〜と事度ことど々々及および〜と後のちハ見みな〜と更さら〜と咎とが
 めめ又また川口かみぐちも〜と蜈蚣むご船ふねを晚おそ〜とこ〜とをさせ〜と是こゝも番ばん
 船見ふねみな〜と後のちハ〜と早はやたお〜と守まもり〜と北きたの方かたを敵てき〜と
 清正せいせいより吾われハ石田いしだも與よ〜と吾われハ石田いしだも與よ〜と北きたの方かたを敵てき〜と

落せよかーと云来りしはバ大木きく事まであり北
 の方に此由を告ぐ梶原が余の下に北の方をありかろし其の上
 りとてきて毎のどくかどの戸をひらいた門番の前を通り土佐も
 跡より供して若見咎めらるる北の方を刺殺し切死すべしと思
 ひし事ども事故なるまは轉法口は行き頓て蜈蚣船に乗こを出
 一番船の前をつと行過る二三町もありしはあれはいつとさき死
 ひーめく間鳥の飛う如く一里あまりもこのむ番船をもたばくろ
 れるよとて碇をあげ追付んとせし間に行過て遂に肥後下り
 着きぬ大木竹田の大坂に居残りし事洩聞え打手来らと思
 ふやど戦んと待懸しに開ヶ原の軍やおきしと思はざるは難を
 のがれり大木りや佐々成政は仕へ後清正は仕へ才畧篤實兼

備へしものを清正寵愛厚りりし今度の事はよりて又二
 千石の祿を増あくらきとなり



前田利長の士松平久兵衛若き頃より兵書と讀一飯の間も
 懈らば常は人は語て云此一人は對するはさあは万人を一刀
 は斬の道なりとて利長大聖寺の城を攻落し引返す時
 利長の士大將山崎長門守淺井躰よりせん云久兵衛道
 細く左右深田なきは大軍の進退いふ有べは半退をせん
 時長重兵を出さば進退ともみかあひごかえし敵ハ案内者か
 り必定味方利候ハトとて山崎聞も入は既に大聖寺を
 攻落し大軍なきは敵ハ攻らまざるをすはらしといふ討て出
 へる若軍を出さばあつみ一人もあまざる討取しとて久

兵衛長重ハ勇将アリ大聖寺の後詰ヨル口オシク思ヒク
 打出ン其鋒日比倍ゼン吾ハ怠リ敵其虚トシテ危キ事ニ候
 又誰モあまき吾城と馬の蹄ニ蹴チシテ過行敵ニ箭の一筋も
 射懸ズシクカマシ居る者ヤ候シ明日ハ軍陣トシテ候ホ
 マク敵を恐メぬ證ハあす人々ハ知らせんものと云ヒテ其夜物主
 皆張番を出テ山崎打巡リ見て久兵衛ガ足輕ハ何故ニ味方迄
 くハ置シテヤト久兵衛聞ル所ハ勝敗の理を考メ敵を侮リ勇ハ
 ちリク利害ハクシク身ハ士を下知事トシテそれトシ山崎聞テ
 敵と恐メクアツシク馬ヲ一をカテシテせんあはれそいふと
 留メリ久兵衛ハ憤テ強敵ハあつて目と驚ハさん物ヲ思ヒ
 定メ居リシ

其夜長重ハ士大将を集メ江口三郎左衛門を大将トシテ夜グケせん
 とシテ一ハ俄ニ大雨ヲ風烈ニ夜討を止ラレバ江口風雨ハ夜討
 ハ好む所アリト人々皆尤と申リシ長重ハ御幸塚の左右沼
 邊入馬のクケ引心メテ明日敵引取ル時追詰ク思ヒ比々
 討勝ベシト云ヒテ
 長重の士大将江口三郎左衛門正良惣ガエリ見渡セバ敵段々ニ
 引退ク時トシテ兵ヲ出シテ行ク敵を喰苗んと銃砲を打テ
 くる長重も亦兵をすめられ
 又一説長重銃砲の音を聞後まふ者ともて馬ノ鎧を合セテ付
 ラシクハ江口ハ願ク今ニ初メ此殿の早ニ裁と悦ビ長
 重ニ浅井山を取り敵の頭上より打テまふは盾をつつ事

ありと云きし江口尤然るべしと云きしに兵三
 百人を引具し浅井山子の敵を目の下に見下し鏖砲と
 打くらむ坂井與右衛門直吉も馳來る長重いしく競ひかき
 一足も前より一寸も退くべしと下知せられし金澤の軍を
 やり終夜の雨の陣屋もあつたれば物具皆濡れ鏖砲
 此銃口小水入り火繩もありけり左右ハ泥あり多くハたゞ様
 此れをいひ入る是ぞとせしと云きし

金澤の殿長九郎右衛門連龍が陣色をくを見く江口塵を取りかき
 と下知すまば松村孫三郎馬を乗出敵の陣中を乗切つて
 荒田五兵衛ついで馬を入る

松村ハ五ヶ所痛手負ひ馬より落るるを小池新兵衛松村を馬ハ

のせ引取せしと云きし

長父子止りしを専途と戦ひるが討る者多し長好連と
 十八歳手の者何れ討せ敵の中みかけ入る討死せんとを横田
 久右衛門馬の口取付引返す長重の軍勝る乗あまし追詰り
 太田但馬ハ殿の陣に軍ありと聞兵を返し馳來る水越縫殿介
 山城橋より槍を提敵に向ふ松平久兵衛ハ太田が陣より足輕
 を下知して居り銀を飾る曹を着黒丸物具より馬を
 馳來り馬に乗る水越の前より進出る小松の士拜郷治大夫と槍
 を合せし水越もついで安孫子作大夫と槍を合せ
 一説松平ハ不破空兵衛と槍を合せし
 爰も双方手負討る者多し互に精力盡く相引ひ退り

りの別をせしなり後利長二人の前後を問はせし久兵衛申す
るハ縫殿衣ハ初より止り候ハ一番誰と争ふ事と申せ縫殿介
ハ久兵衛敵ハ槍を合せし事と申すハ一番は中より利長聞
く武功ハ猶及ぶ者ありんか譲る志万々もこそうとて一番を松
平に定めぬ共ハ感状あられぬ松平此時祿五百石後三万石
を賜りて伯耆と申しり

一説松平を松原小作何事是なる事をあはれ一説此日金
澤の士七人槍を合せり中にも岩田傳左衛門小松方の手負
るを首をせんといふハ松平久兵衛岩田今日もは多し槍を合せ
其上よりひひ首何事のせんといひハ岩田尤なりと同時引取
りあり後小岩田曰首を取ら大音あげ岩田傳左衛門槍を合せ

又首を取ら引取口の殿と呼ぶハ一芝居より三度の功名ありと
松平ハ物故聞下知より引取せし後ハ悔しむるとなり岩田
後ハ孫藏介と稱し又利長淺井より槍合ハせし士ハ感状あ
らざる由小松は聞えハ小松の士共殿も御感状下し給
つんやと云はるを長重淺井暇ハ道細く左右深泥多くかけ引自
由あり勝敗定まらざるなり退く敵を追詰橋の
あふさしやせり合をせし橋のとあはれりとの別せしハ引取
敵ハ少しあはれ追返されざるハ似し是ハ人々武勇の働ハ事
なり感状ハあはれぬ及んばと申しり

○ 利長の兵山田勘六郎ハ十四才より父の仇を討する人ありある日利
長撃藏の戸を開くとて山田ハ鎧をあはれりてハ内急急き来

呼びしはあきうりし念て持し杖を突きしと思ふ
額の中より血流る跪て平伏せし脇差の鞘走りし手む
らひもすやとてききみうけて杖を打んとせし山田を引
のけし山田此より病と稱して引らる居るし関ヶ原の亂
起りし利長大聖寺の城を攻る時一段高き所を打上り武者お
しを見物せし山田五六十人計引具しるを最期と出づる
通り城ふれくと先がけして一番に乗込槍より乳の下を突とち
痛手あれバ堞の下ふかるかて從者ふれいめく息絶る内
利長の前ふ昇来る利長見く後悔せし事甚しく其あやまちを
懇ふとるうり涙を流る山田やうて死り行年廿歳世ふす
美男なりし大剛のまゝ討死し其前日ありし朋友

よ奇南香をもち贈りしを其頃大聖寺にやうとらひしあてや
くうとらう

黒田孝高入道如水関ヶ原亂の時九州を打平げらるし乗れ馬
ハ二寸計の黒き馬あるが百會は手負とよ旋毛有り如水此馬を
指しし此凶相をあさるまれば人ハ萬物の靈なりと聞
たり人ハ勝へき萬物なり吾不道あるハ凶相是より大あるハ
此馬の毛きげわかつべと云ハせしやと

関ヶ原亂の時大友義統杵筑城を攻ると聞る如水後卷せし
し大友立石お引退き石垣原お先陣をおし出れ黒田の
士大将久野治右衛門歳よりとて曾我部五左衛門を添られ
し敵四五千計立石の民家を後よりあて待りけるを久野遙る

見え金の天衝のさし物さし栗毛馬も乗かれと下知しつ
 を曾我部今志と待きまじやば勝利候まじあり立て馬息つ
 がせ一同みこりてはらせ後味方のほらん時衝かり一戦きべいと
 聞入る久野が従者荒巻軍兵衛と名者豊前の地士なり
 一が若た時宮松とひく十五歳より功名せ剛の者五右衛門
 が詞尤なり馬もあて倒し蹴ちりと申へ敵はよるべいと敵の
 國替の時よくまうする者あり皆物あり近年落ぶきて此乱を
 死まへき時節と思ひ定め槍を膝の上におろさぶまりある所二騎
 二騎ちうくとおかけ合せんよらて勝ぶさ槍をつき折かどの軍なうてハ
 叶ふへうらんとて馬より飛下り久野が馬の口も取付る氣あう餘
 りのちうりやうよこそ候へ後陣は先をこさればこそ耻あう免後よお

詰ん時懸てつき崩まべいと云とらふ平田彦右衛門とらふの馬も
 な乗あうらなく後陣をまんとせ井上野村すき男あれば必先を争
 へ大友が者ども杵筑より疲き又爰も来りたりすめくといひきい
 荒巻怒て平田汝と共に豊前の者ある度々手あへ知するよ今井の
 濱に軍も汝を追りけし具足押付切たり一疵ハ有るを其後
 四兵衛門が汝を呼出ると問き一時汝がけりさゆ討すとあがり
 きとひつる故も祿を得るばは蔭と悦ひハ忘さるうとひひすて
 馬も乗先がけしれに二十騎計はらうとあつりかりり敵三手
 る分きたるを一陣を突崩き久野もやう者なきは少もせめりけ
 一文字も乗込戦ひなきども大友が兵ども度々の事ふたき今度
 の乱きも故主の招きも役ひらふを限ると芝居もひきや折しき

待^チかけきられ久野主從五騎一所^ト討^ツぎたり曾我部^ハ久野^ガ討^ツぎる所^ニ横^ヲあひかけ入^リ討^ツ死^ス平田^ハ久野^ガ討^ツぎと見^テ馬^ヲ引返^シ引^キ退^ク荒卷^ハ敵^ノ競^ヒ掛^ルを見^テ引^ンと^ス人数^ヲ集^メ敵^ノ嚴^シ進^ムを見て首^ヲ皆^ヲ捨^テ馬^ノ輪^ヲを懸^ク引^キ後^殿引^キ退^キ久野^ヲ討^ツ死^スを^知ら^ズ故^ニ其^ノ日^ノ功^名い^ハ成^ルり黒田^ノ二陣^ノ士^大將^{井上九郎右衛門}元房^{後周}野村^{市右衛門}後^隼人^遙跡^ヲ聞^ク此^ノ山^ハ上^リ敵^ノ軍^立を見^招く^ヘと井上^手の者^ハ下^知進^ム行^野村^先軍^有ハ^分明^{アリ}何^見マ^クる事^ノ有^ルべきと^スも井上^陣か^一つた^め通^スれ^バ今^少先^ハ押^出され^ル廣^キ所^ヲ陣^{せん}と^ヘも聞^キ入^レば^獨言^シ怒^リる所^ニ井上^主從^三騎^小山^ヲ

乗^リけ^テ物^トぬ^レ味^方を^まね^キ陣^をめ^リ

井上^唐冠^ノ曹^鳥毛^ハ棒^ノは^一物^ヲ又^佩楯^ヲ取^テ捨^ル

井上^野村^敵ハ^皆か^ちあ^り馬^ノか^け場^ヲた^のむ^ル必^死ノ^敵ハ^かる^レく^一か^り皆^馬立^勝乗^ル敵^ヲ殊^々譜^代重^恩ノ^士ど^も限^ヲ思^ヒ定^メた^る敵^カる^トも相^カり^ます^レ待^軍突^崩し^たる^トも足^ヲ乱^シ追^ベぐ^レと^下知^レま^す

お^うは^大友^ガ兵^是を見^テま^はす^レが^けせ^ば忽^突崩^{さん}と思^ひま^すぎ^びり^野村^ハ朝^鮮漢^南ノ^軍功^名膝^ヲ手^負行^歩心^任せ^ざれ^ば片^カち^のま^て候^なま^し馬^ハ乗^候と^して^下知^レり^石垣^原ハ^原ノ^中高^サ一^丈餘^ノ石^垣土^手六^七町^計も^つて^り井上^野村

あの石垣をこえよ取らぬ軍は勝べしと進みよ敵も同く進んで石垣を踰んとせしをつき崩したまも北を追き井上槍を横之に押し野村の馬を乗廻し兵を整へり大友の士大将吉弘加兵衛宗像掃部是を見よかくて味方まけ軍あぶし敵勝れ乗る足を乱さん處を追立んと思ひし力なるとも討死せんと思ひ定めればいかにやらんとて二千計あぶくとあやめよ井上野村是を見よ少しもささげば折敷に相がらぬ待懸り間近に詰寄て散々ふ突合切合る大友勢一町計引退き追もあらずかしの芝居を跪し心静し息を休む大友勢又押懸りて爰をせんと火を散りて戦ひり吉弘の眉尖刀を打ちりふを最後とふるひるを井上見ていざ参りあんと詞をかくれば吉弘打笑ひ渡り合せし草摺のむづき十文字の槍はつらき深手なれ少しもあらずを小栗沼右衛門の従者弓を持てる真中を射りぬ吉弘心猛しととも終に叶えし首をば小栗取てり又一説に吉弘は黒革まであぶし甲を着熊毛を飾りし曹まき三尺計の刀を以り井上と馬上にて渡り合馬より突落され脇指を抜て手裏劍を打つ井上弓手の股の中其間小栗引組で吉弘の首を取るとり又一説に吉弘と井上は吉弘一年中津よりありてあぶし深き一は此日井上に向き球一や一槍参らんといふて突合し吉弘の胸板を二槍まき突きまき甲がらぬ裏かへ井上吉弘の内曹を突りし十文字の横手も忍の緒を切胃傾きて目をさざれば少しもあらず所を吉弘がたの脇より下着の青く出るを月懸て脇腹をさすりし吉弘遂に討きしとあり又此軍

十九

あの石垣をこえよと取らば軍は勝べと進みし敵も同く進んで石垣を踰んとせしをつき崩したまとも北を追き井上槍を横へし押よめ野村ハ馬を乗廻し兵を整へし大友の士大将吉弘加兵衛宗像掃部是を見ろかくてハ味方まけ軍あぶし敵勝る乗る足を乱さん處を追立んと思ひし力なりとも討死せんと思ひ定められはしからんといふ二千計あぶくとあやまる井上野村是を見ろ少しもささげば折敷と相がらぬぞ待懸し間近く詰寄て散々ふ突合切合と大友勢一町計引退き追もかたの芝居し跪し心静し息を休ぐ大友勢又押懸り爰をせんど火を散して戦ひり吉弘ハ眉尖刀を打ちりふを最後とふるひるを井上見てし参りあんと詞をかくれし吉弘打笑ひ渡し合せし草摺のたづき十文

字の槍ホつせと深手なれ少しを小栗沼右衛門が徒者弓を持し真中を射りぬ吉弘心猛しととも終に叶し首をば小栗取てり又一説は吉弘ハ黒草子ておとす甲を着熊毛を飾する曹も三尺計の刀を以り井上と馬上て渡し合馬も突落されし脇指を抜て手裏劍打つ井上が弓手の股中其間小栗引組で吉弘が首を取るとり又一説は吉弘と井上ハ吉弘一年中津よりあつてあつて深き井上此日井上に向き珍しや一槍参らんといふて突合一し吉弘が胸板を二槍まき突りしとも甲がくも裏かへ井上吉弘ハ内曹を突りし十文字の横手も忍の緒を切胃傾きて目をまきりれ少しをさる所を吉弘が左の脇より下着の青く出るを日懸て脇腹をまきりし吉弘遂討きしともり又此軍

場の跡に吉弘が厲鬼あつてもせぬと云ふ人ふ祟をふりたる故吉弘が
 り人石垣原のかた別府と云ふ所に吉弘の屍を葬りて別府清田濱
 田の百姓かたをなやめ米を供ふ忽ち吉弘の嫡子ハ清正ハ
 仕へ二男ハ細川忠興ハ仕へて父のまき跡を見んとて別府ヲ行きて
 其印の石を拜せしが多く米を供ふより鳥の集めて糞をたが
 ぎし今より武具をそとて治し給へさるる治し給へされといひ
 しが是より米を供ふ事より木刀を作て供ふ事ありありとい
 宗像も井上ハ従者大野勘右衛門と引組する所ハ勘右衛門が弟
 休也と云ふ法師武者走り掃部ハ脇腹ハ刀を突立をいれやとね
 たりれば遂に討せり大友の勢突崩さきてはまは引キ又た



○

かり戦ひりきども井上野村追うけせりとの芝居ハ跪き又かきば立ち
 たり突のけ幾度と云ふ事をいへ大友ハ勢終ハ打負て殘しとて討せ
 たり僅計ふなりて立石より引返り義統力盡く如水ハ降参せられ
 義統杵筑の城に向ふ時細川忠興の士大将松井有吉加藤清
 正ハ加勢を乞うられ三宅喜藏をやりり三宅殿の先陣とて功
 名せんと思ひり他國ハ往り城ハかまり事ハ存る寄ざる事
 ありとて清正汝が武功ある故ハ他國ハつらとて五口名を汚
 せしと思ひ寄るも巴ハ名を食ふこと心得ね永く我家を去り心
 せしめしれど殿を奉公せんと存る大将ハ候はあき隠し置

給^{たま}ふんやとらひ^ひを^を舉^たげ人^{ひと}心得^{こころえ}と許^{ゆる}し^しも^も清正^{せいせい}宇^う土^{つち}の城^{しろ}を攻^せる
 時^{とき}三^{さん}宅^{たく}ハあ^あの^の三^{さん}本^{ぼん}本^{ぼん}の^の差^さ物^{もの}き^き夜^よ半^{はん}より^{より}塩^{しほ}田^{でん}口^{ぐち}の^の堤^{つとみ}行^ゆく^く明^あ
 る^るを^をま^まの^の宇^う土^{つち}は^は南^{なん}條^{じょう}元^{げん}琢^{たく}ら^ら居^ゐる^る此^{こゝ}元^{げん}琢^{たく}ハ^ハ伯^{はく}耆^し羽^う衣^い石^{せき}の^の城^{しろ}
 主^{しゅ}南^{なん}條^{じょう}左^さ衛^ゑ門^{もん}元^{げん}次^じガ^ガ二^に男^{なん}少^{せう}兄^{あに}の^の元^{げん}重^{じゆう}ハ^ハ劣^{おと}ら^らぬ^ぬ大^{だい}剛^{こう}の^の者^{もの}あ^ある^るガ
 毛^{もう}利^り元^{げん}就^{しゆう}と^と軍^{ぐん}事^じ度^た々^々及^{およ}び^びる^る敵^{てき}寄^よと^と聞^きて^て只^{ただ}一^{いち}騎^き馬^ば上^{じやう}ま^ま上^{じやう}
 帶^{おび}ま^まり^り出^い出^で半^{はん}里^りガ^ガ程^{ほど}ハ^ハ軍^{ぐん}兵^{へい}ど^ども^も追^おつ^つり^り速^{すみ}ニ^ニ國^{くに}境^{さかい}ハ^ハ馳^は行^ゆ
 押^お寄^よる^る軍^{ぐん}兵^{へい}を^を追^お散^{さん}し^しる^る勇^{ゆう}士^しなる^るガ^ガ秀^{しゆう}吉^{きち}の^の勤^{きん}氣^き々^々小^{せう}西^{せい}行^{ぎやう}
 長^{ちやう}ガ^ガ許^{もと}み^みか^かり^りて^て朝^{あさ}鮮^{せん}ハ^ハ武^ぶ勇^{ゆう}ハ^ハ振^ふ廻^ませ^せり^り此^{こゝ}度^た清^{せい}正^{せい}寄^よる^る
 と^と聞^きキ^キ只^{ただ}一^{いち}騎^き城^{じやう}を^を乗^のり^り出^い出^で元^{げん}琢^{たく}ガ^ガ從^{じゆう}者^{しや}福^{ふく}西^{せい}九^く郎^{らう}大^{だい}夫^ふ是^{こゝ}ハ^ハ十^{じゅう}八^{はち}の時^{とき}
 あり^り朝^{あさ}鮮^{せん}の^の軍^{ぐん}ハ^ハあ^あひ^ひて^て物^{もの}師^しあ^ある^るガ^ガ元^{げん}琢^{たく}ハ^ハな^なく^くき^きし^しと^と城^{じやう}を^を出^い出^で馳^は行^ゆ
 所^{ところ}ハ^ハ山^{さん}の^の上^{うへ}ハ^ハ清^{せい}正^{せい}の^の馬^ば蘭^{らん}の^の馬^ば印^{いん}ハ^ハし^しり^りと^と見^みえ^える^るハ^ハ彌^や進^{しん}んで^で

三^{さん}宅^{たく}ハ^ハ行^ゆ合^あフ^フ元^{げん}琢^{たく}馬^ばより^{より}下^{くだ}マ^マ三^{さん}宅^{たく}と^と槍^{やり}を^を合^あせ^せる^る處^{ところ}を^を福^{ふく}西^{せい}透^{てう}
 間^まなく^く走^はり^り三^{さん}宅^{たく}を^を斬^きる^る三^{さん}宅^{たく}ガ^ガつ^つき^きる^る槍^{やり}を^を元^{げん}琢^{たく}握^{にぎ}り^り引^ひ奪^{だつ}
 ひ^ひと^と既^{すで}ハ^ハ危^{あぶ}う^う三^{さん}宅^{たく}ハ^ハ從^{じゆう}者^{しや}元^{げん}琢^{たく}ガ^ガ曾^{そう}の^の真^ま向^{まう}を^を一^{いち}刀^{たう}斬^き付^けり^り元^{げん}
 琢^{たく}目^め眩^{くら}ま^まく^く廻^まり^りあ^ある^る刀^{たう}を^を抜^ひて^て三^{さん}宅^{たく}ガ^ガ從^{じゆう}者^{しや}を^を切^き倒^{たう}き^き清^{せい}正^{せい}齒^しの^の
 三^{さん}本^{ぼん}ガ^ガ多^たハ^ハ三^{さん}宅^{たく}喜^き藏^{ざう}ハ^ハん^ん討^たち^ちあ^ある^る者^{もの}と^とも^も下^{くだ}知^しせ^せり^り詞^{ことば}の^の下^{くだ}り^り
 飯^い田^だ覺^{かく}兵^{へい}衛^ゑ庄^{じやう}林^{りん}隼^{しゆん}人^{にん}馬^ばハ^ハの^の鎧^{よろい}を^を合^あせ^せり^り來^きり^り元^{げん}琢^{たく}敵^{てき}
 不^ふた^たあ^あは^はり^りふ^ふんと^と三^{さん}宅^{たく}を^を引^ひ返^{かへ}り^り清^{せい}正^{せい}三^{さん}宅^{たく}を^を呼^よび^び其^{その}日^ひ被^ひら^ら
 ぎ^ぎ羽^う織^おみ^み千^{せん}石^{せき}の^の標^{ひょう}を^を添^そえ^えり^り
 又^{また}三^{さん}宅^{たく}元^{げん}琢^{たく}ガ^ガ曾^{そう}を^をつ^つき^き落^おせ^せり^り頼^{たの}み^み手^て負^おい^いし^しも^も淺^あ手^てな^なれ^れ
 三^{さん}宅^{たく}ガ^ガ槍^{やり}ヲ^ヲ取^とり^り付^けし^しれ^れも^も三^{さん}宅^{たく}槍^{やり}を^をす^す組^{ぐみ}合^あし^しり^り
 其^{その}後^{のち}関^{せき}ヶ^が原^のの^の軍^{ぐん}破^やり^り行^ゆ長^{ちやう}生^{せい}捕^とハ^ハあり^り清^{せい}正^{せい}使^しを^を城^{じやう}ハ^ハ

立城を明候へ云々一うは城代小西軍人自害して城中の者
とも助け給はんやと申は清正許諾して八代の城代小西若狹
も自害一宇土八代を清正も授く清正南條六千石の祿を與
へられり三宅と南條と物づらするに元琢汝を討留せし残多
しとたふきく三宅我も存多ありをいひるるとを

三宅宇土少組の時忽刺殺まべき其日指し小脇指少
一長うり一故ありと語ア一と云ア

○
清正宇土を圍む時ある夜敵夜討まべりなめとて下知せられ
り果して杉本次郎を大将とて清正の陣に夜討せ日下部
平次坂川忠兵衛槍を合せ散々攻戦ふ杉本守固きを見て城
中へ引返は田中兵助ハ酒ハ酔る臥居りしが鑊砲の音ハ驚き

起り槍を取てかけ出しに敵引取皆門内入る杉本一人大手の柵
の木戸口ハ残り止りり田中詞をわけよと杉本十文字の槍うく
田中を一槍つた柵の中へ入りりり清正火を燈し軍せ者とりを
呼き一田中今夜先づいりり申は清正能見る一番八日下部
坂川二人の内あり二人とも箭創あり弓ハ槍を合はする時射る一同
あつてハ射がさきものなり田中ハ右の腕ハ槍創ありハ左の手ハ
あつてとて横ハ疵のあるハ汝が自ら切つるまると云き一田中敵ハ銀の
たもよかの立物打つる曹を着十文字の槍を杉本次郎と名乗る
りを猶偽と思召候はんハ不幸の至候とて退きり後城明
た杉本も清正ハ奉公りれば此夜討の事を問き一杉本
城へ入んとて一時とらまの曹を着槍を提て走り來候武者を

一槍つらぐ候と申し清正田中が詞證據を符合しき五百石の
 祿ありたる田中其夜一通の書を残し虚名を蒙り世の誹あり候程
 小加祿も本の祿を添え返し候とて肥後を立退り田中其初盗
 賊あり有りしが石川五右衛門といふ強盗の長を秀吉の時京の三
 條河原にて刑罪せしむ道々見物の男女群をあり田中其中
 小紛まき石川を引と過る時ふつと飛懸り石川が繩取を唯一刀
 小斬倒し五右衛門殿日比の恩を報し候と呼はりさきぎひめく
 間ふ人の中ふ走り入終ふ逃出り男あり此時二十六歳らのや
 関ヶ原の軍功有る諸将の家臣を召し東照宮御盃を下さ
 れし時福嶋正則の士大将福嶋丹波八波尾関石見八眇あり長尾
 隼入ハ聳なりしは近習の人々能もかその集り候と云ふやたるを

聞し君汝等年若くも能聞け女ハ容儀を尊ぶ事あり形ハい
 うよせよかゝる軍功名しを男と云まざるぞか彼三人ハ世ハ勝
 びたる大剛の者あり汝等志十ハ二三を彼者ハ似せしんハナリ候と
 ぞ仰せまざる

○
 関ヶ原の後東照宮石田が亂ハ雨ふり地ふるまるといふも同ト此より
 静謐ありんと仰せ有し諸大各皆祝し奉りて慶ハ加藤清正仰
 の如く悪逆の輩誅せしん恭平とん事必然ハ候然も天下ハ
 治乱ハ天の陰晴とて候いあんハ晴渡り晴天と見らる俄
 雲の出来て雨ふり候如き事も有る候と測らるハ人の心
 みて候と申されは淺く御感ありと云ふ

但清正の此論は此の所より事なりと詳あり

関ヶ原の時黒田如水ハ豊前中津より九千餘の兵を率ゐ
 九月九日打出諸所の城をも攻落し筑前筑後の浪人共相集り
 大軍を成し時嫡子長政は使來り関ヶ原にて石田をせめて敗北し
 金吾中納言秀秋ハ長政の謀めよと裏切せしむ由告らざれば
 如水大に怒りつり果てて甲斐守とな天下分目の軍ハ旦と月日
 を過し浪人のすむまゝをあらはしあり何事の忠義がてそ日本
 一のうり甲斐守なりとぞはふやうせらる其後長政ハ筑前を賜
 りりせよ如水ハ京上らざらる諸國の大名如水の門來りて市を
 おしり山名禪高如水と年比の友なり如水の許ふ來りて諸
 將の尊崇大方おる殊ハ夜中ハ密談し候とて世の疑ふ事も
 候なり就中三河守秀康親の如くハ敬ハき候かゞ徳川殿怪し
 思召々處あり徳川殿遠き慮ある人なきバ心安く立入人の中ハ
 もいふる目附を設けしむらん筑前守の武畧徳川殿の賞恩淺り
 らば候ハ斯てハ筑前守の為ハ惡うなん徳川殿まきうう用心あり皆
 如水を恐めての事なりと人々申候猶又醍醐山科宇治ハ浪人あまた
 居候も如水の隠し置きと人々疑ひ申ふりいふと申されりふ如
 水聞もあやむ内府を攻亡し天下を取んと思はんハいと易き事
 なり筑紫を皆打平けり嶋津の殘りハあつひを懸て
 味方とせん若楯つらむ攻敗らん事尤易き所あり中國備前播
 磨まが皆空國めて有るハ我其項二万餘の軍兵をひきか藤
 鍋嶋ハ既り我ハ随従にきバ兩先陣として海陸二手ハ分ち道す
 が浪人どもをかり集んハ十萬ハあるべし清正ハ猛將あり吾旗本ハ

清正ハ猛將あり吾旗本ハ
 浪人どもをかり集んハ十萬ハあるべし清正ハ猛將あり吾旗本ハ

一ありて攻めたる程あり内府を討滅ん事掌の中よりわくと覺え
たきどもこそ是年老み切從へ一國を捨る京上より一臆病者
どもなきはけしむる事の事不恐まると事事を誠と心得らるる
るやとく扇をぬりて畳を打く大言せらるるは禪高かかくの
詞なくて帰らるる事

常山紀談卷之十五終

常山紀談卷之十六目次

- 一 浮田秀家八丈島へ配流の事
- 一 小早川隆景遺訓の事
- 一 佐竹義宣國替の事并車野丹波の事
- 一 杉原常陸智勇の事
- 一 前田慶次りの事
- 一 出羽國長谷堂合戦上泉主水討死の事
- 一 伊達上杉陸奥國松川合戦の事 附 永井善左衛門岡野左内が事
- 一 石田の子に僧助命の事
- 一 越後國一揆堀直奇武功の事 附 千利休が事
- 一 世間太兵衛伏兵を知り事

常山紀談卷之十六

備前國 湯淺新兵衛元禎編輯

○備前中納言淳田秀家ハ関ヶ原の時一萬八千を帥^{しゅ}りし軍敗^まりて
 近江の伊吹山より落^おりけり美濃の白檉村^{しろしげむら}にたゞりてあり
 一不遂^{ふとすい}と忍^{しの}びて西國^{さいこく}に落^お下り陸州^{りくしゅう}に着^つきし其^{その}事聞^きえり東照
 宮死罪^{しざい}一等^{いちとう}を宥^なめさせり八丈島^{やぶさね}まで流^{なが}されし事^{こと}不苦^{ふく}ろく
 菴^{あん}竹^{たけ}ありし戸^とは雨^{あめ}もたまらば風^{かぜ}もぬせり子^こハ黒木^{くろぎ}の柱^{はしら}を削^くりて書^か
 付^つけり

りハ焼^やきめり身^みハ浦風^{うらかぜ}のどよめりしやと云^いふことごとく人^{ひと}

其^{その}後^{のち}芳烈^{ほうれつ}公^{こう}光朝^{みつあき}臣^{おみ}備前^{びぜん}にたゞりし事^{こと}比^ひ兒^に島^{しま}一^{いち}説^{せつ}西^{さい}の商^{しょう}船^{せん}風^{かぜ}より

八丈島^{やぶさね}より秀家^{ひでや}九十餘^{せうじゆ}までたゞりて居^ゐりし事^{こと}故^{ゆゑ}

郷の者といひてかろくげふはまくの物語にて

秀家備前より誰か有りと問ふ新太郎少将と答へ申さる誰か事を
らんて家老の姓名を聞て後さへ池田の家より有るよ又所々
城多きや城の北は伊勢の宮を設け置るがいうちりごとと問ふ伊勢の
宮はいづれとも上の家ひく相並ひてきくといと答へればさへ世に治り
たり亂世なりんる國境の城は士を分ち置岡山より士の家多りるま
しきふ今の有様より治まきる趣を知りていづれいづれ

羽帝の御製を短冊に書てかの船人よりあへらきくくぞ
安藝中納言毛利輝元は関ヶ原の時秀家と共に徳川家より前を取
しりとも関ヶ原より自ら趣くがりの故は安藝備後等の國を削られ長門

周防兩州を賜りて是より前小早川隆景遺訓にて輝元を諫めら
る中より毛利家五十餘郡を領し富貴誠は溢りていづれ此よ
り後苟も國を貪る心あらば忽滅せざるよといふられは輝

元隆景の戒を忘る果して國を削られし隆景先見の明りある露
もくがはるる隆景は武勇のよあはる智謀ももくもく父元就
病重くなりて其子を集め兄弟の數をど箭を取寄せ多くの矢と一ツ
あて折ららんる細き物も折ぐ一筋づつちて折らむといふやす
く折るよ兄弟心を同くして相親むと遺言せられし隆景其時争ひ欲よ
り起りし欲をややく義を守らば兄弟の不和いふといふ元就悦
ひく隆景の詞に従ふていづれいづれ秀吉九州を討平けりて後筑前

五十万石を小早川よりあへらるる隆景はれい吾も過ぐる事なり此項は

て敵なり一身又大國をあらうらうの吾を愛するふ非ず九州をなつらん為
のかり謀り思ひく秀秋は國を譲り備後の三原より引こられ

○ 佐竹右京大夫義宣の士大将車野丹波ハ剛の者より白練は火の車を
書く指物ハ関ヶ原の亂は義宣上杉ハ心を合せらるるは

義宣四万の軍をひきゑる水戸の城を出多珂郡に到る上杉ハ加勢の
為なり然きとも父常陸介義重ハ徳川家は心有りふば忠告諫
められ故義宣も兵を水戸に返さるるは

伏見より義宣の八十万石を六十万石削られ出羽の秋田二十万石賜り
若しむむあふ其俵討亡まき体あれ義宣北國を継下秋田より引こら
り水戸の城を奪ひとれり本多正信寺向ひより時車野組ハ付き士六人と俱

は物具一新羅三郎より傳へる城を人ハ投ん事あり口惜く我と
もらん人々の城を枕は死ねやと呼り城中はかけ入りを大手より本多
等大軍よりおつみ生捕く磔はわけ火の車の指物をとり添えり
東照宮聞一召武家の道を知る者を空しく殺しるると歎くせむい

駿府より東照宮御物語の序は篤實なる人の世は希なり又ハ年老ぬれ
とも多く見れば佐竹義宣其人なりと仰られを永井石近大夫直勝義
ていふ故より申を聞一召石田治部と七人の大名と大阪より争
論の時義宣と三成とよりやよりあつみ有り故三成を打具一伏見よ
来り其後三成佐和山に歸り時七人の面々道より討取りとより
を聞三河守と添えり小義宣三成を討せては生けりといふ道は

の聞を出し其身の物具を告来を待て打出んと用意有りと
 聞是篤實にあつばや関ヶ原の亂の時も大坂より頼みしつゝの伊志吾も其
 よしを告て何方の組せしむる逆乱を興しつゝのあつばれども捨
 置難く先祖より已來の國を削りつゝた篤實のよき事ゆふ及ば
 ばとつゝも國の存亡はあつばるべき事は又一思慮有べき事やとぞ
 仰りまはる

○上杉家の士大将杉原常陸の智勇備りたる人あり東照宮宇都の小山よ
 り引返させし時上杉家の軍兵も大よつばあつばる小杉原獨眉をひ
 そめて大敵を恐む引返しつゝつゝ其人を知らざる詞なり徳川殿諸
 將をひきき先上方より攻上り石田を討まんは十は八九石田敗北せし其時
 殿一人少くいふや徳川殿は打勝りぬとて敵國を攻入りて引返しつゝの味

方の不幸なりと云々

杉原白石の城を守りしつゝの時の事や伊達政宗不意に押寄る
 事あり政宗の物見の士をせ歸り敵へあづまり返りて唯町家は火
 の用心厳しく呼つゝ物具しつゝ武者杉原とわはしつゝ城門を
 開き將机をかりて待居りつゝつゝ政宗謀有んと恐む引返
 せしつゝ

○前田慶次利大忽々齋と跡に加賀利長と従弟なり

一説は利大い瀧川儀大夫の妻懐胎して離別し利家の兄藏人よ塚し
 前田家よ生るしつゝ

前田の家を立てて

利大の文學を嗜むとて藝も達せり滑稽もして世を玩ひんと

輕一々の故利家教訓せらるる事度々及了利大大息つりたど萬
 戸侯より心よまるせぬ事あれば匹夫は同ト出奔せんと獨言せり
 ある時利家は茶奉るよりソレを悦び慶次を許す来りし小
 慶次水風呂に水を十分よとてかへ置湯風呂のい入るんやと横
 山山城守長知をりて利家よりかゝるんて浴所に至る慶次自
 ら湯を試みよくいと利家何の心もなくあるよゆりし寒水
 をとて利家馬鹿者に欺きよ引來せりて慶次松風
 とり逸物の馬を裏門に引立させ置くりし小打乗出奔しけ
 るとそ又京より夏の比馬を川入にやせり馬取の腰に烏帽子
 を付させり道より往來の人立ちゆりゆりて馬多し
 誰の馬もいと問ふ則烏帽子を着足拍子をもよこし此鹿毛と申

ハあういちよりうい皮むらぬ茨がくき鏡甲鶏のころさう立之が
 前田慶次が馬よとくと幸若の舞を謡ひ引通る見よ人の問
 度びり小かくまるとなり

上杉景勝は仕へり

初て目見ると時土大根三木堂に居り出り

朱柄の槍を持せりば何ゆゑぞと咎む小父祖より持せ来りし
 り水野藤兵衛並塚理右衛門守佐美彌五右衛門藤田森右衛門年
 久し朱柄の槍持せん事を望み申せり許されば然る小慶次を
 刑禁するに四人とも小許されしと訟と許されり直江山形に
 攻入引返る時最上義光大軍より追ふ洲川より軍有る小義光
 旗本をいひて切てわり合戦數刻に及びり上杉勢引取兼し

直江怒るれば大将とて此口に向ふは事口惜き事なり
へ怒りたる小慶次馬の前より立ちあがり笑ひければさうせらるるといひす
て敵味方ふらみ合はる處より馬を来りけり杉原常陸の先陣ありて
種ヶ島の銃炮を下知りたるが慶次より立ちあがりてわらわしとて馬より飛
下りたり慶次其日の出たるは黒き物具は狸々皮の羽折を着金のいろ
高の珠敷のいろ小金の瓢箪付のいろを襟よかけ山伏頭巾にて十文字
の槍を持黒の馬は金の山伏頭巾の中におぶを唐鍔くけり前田慶次と
名乗てわらわする處より水野重塚守佐美藤田四人も同く槍を引提はか
めればけんく念なく敵を突退けり杉原種ヶ島銃砲二百挺小高き
延へおろしあげてせり故物よりせんば慶次下知して引取り
慶次指物祈りよ大ふへん者と書りてふ人々あり此事よとて

慶次汝より武邊よりわらわし落しきく貪りたる大不辨者
とてわらわしとて威しとてや
上杉家祿知削りきり後士多く暇を取立去る小慶次を七十八石
一万石を以て指く大名あり慶次これ此度の亂は諸大名表裡の心見限と
る景勝ありてはさう主君とて人々を扶持し置てはさうわらわしとて五百
石の祿より民間より引込風月を樂しむ歌學よ心を寄せ源氏物語を
讀み世を終まり

上泉主水憲元は甲斐の武田家より敵討の上手上泉伊勢より弟ありか
るれ有る者ありて京の相國寺の内より落ぶる身を寄居しを秀吉
の時直江景勝の供へて京より至りて傳へ聞て對面しては上泉と
いへる一會津の遠國なるも景勝三千石の祿よりわらわしとてわらわし

正泉わく身と思ひゆふ詞を兼るして仕へたり直江出羽小
 押八時上泉も三千五百の將より取上方より山の上下より幡屋まで二十
 四ヶ所より出城を設けし直江の真直山形より攻めんと謀
 りし処に幡屋より春日右衛門よりある者ありて思ふ事とい
 ひはる直江悦んで山形より兵を押し止め山路より幡屋より
 んと軍奉行杉原常陸春日右衛門が一陣を以て幡屋より然軍
 へ山形より攻めんと然るに敵我の利をわく峻岨より其山形
 山形の要害を断せん謀なりとて直江も杉原も中より
 されば我の唯易きを就んて聞入りて幡屋を取囲て一時攻め衆破
 りたり
 一説に長谷堂より内通の事を以て送りたる直江大に悦ばるを杉

原是に赤松圓心より白旗の城より新田左中將を欺きし謀ありて
 山形の要害をわくし謀ありて只山形より攻めんと謀ありて用
 長谷堂より押寄りて内通の事なりとて直江欺きし謀ありて
 るより出城を只一日中より二十ヶ所攻落しはる山形より押寄りて上
 泉より云山形の勝つて要害より西南の沼より東北の石壁高く柵の木七
 重有矢倉二十餘所ありて且義光の先祖より數百年此地より士卒は物
 ありし者多し力攻めし思ひゆふ所々の小城數多攻取りし者
 氣を示し軍を返さん事然るに直江あき笑ひ軍を出せし
 山形を攻めんと今更山形の要害よりまばりて引退くやあは浅
 黄志の差物より利根川二本木に先陣せしむる小すて関東より
 るきを憚りし淺黄志あはを指のなりと聞たりし覺えぬ事を

りつゝ馬を多く上泉口惜き事ありと思ひけり直江ハ進んく菅澤山
陣一々此處も長谷堂より十九町あり義光も二万餘の兵をひき
山形を出長谷堂の山は尾崎稻荷山は陣を長谷堂より山形の加勢も
来り要害より攻めんとす攻め討て出ての軍ハ危しと制しつゝ大
風右衛門二百計を切て出上泉が陣に向ふ上泉大勢よく押つみあま
さりと戦ひつゝ大風僅し打ちきり切ゆけて城に入り伊達政宗も軍
を出し先陣長谷堂の城下より押来り陣を取り直江ハ大風を討得
ざり事残多し此城を唯一時し打破き下知し城際より攻寄り直江
高を呼り打上り石火矢を透間より打懸り小只千雷の落り
が如し志村伊豆鮭延越前を専途と追出しむむは相戦ふ其
日も戦ひ暮り多し直江又三千余を城の後の山に上らせ銃砲を打か

らまが城より切て出死傷數を多く直江軍兵を四方を焼く
とらけす所々軍あり長谷堂の城下より大なる池谷を堰おして水を
せき湛へると營より物見の兵を遣し又一陣を以て焼く
城中よりひひ曾八百計切て出し直江使を以て引取き下知せん
もあつて引退す使も行くに歸らんが次第に軍兵行重り鏡
砲を打合ふれば直江杉原より軍を引上りれと云上泉我こそ行
り杉原進む年若く人の業引揚る老年の我は協ひり同心
せざる上泉存る子細のいとひもあらず馬を乗出しれや組も付られ
大高七左衛門馬を乗付上泉を引くは士大将の只一騎もかけ出
るやあつ有るもかりと以とも耳も聞入らざり大高もついで前
田慶次字佐美民部上泉が陣より行一陣の大將敵を乗入るをよそふひ

うごうの士の本意は非ずしむるをよししむるも進むるの見えざ
るに前田をとりて二十騎をうり馳向ふ上泉大高の馬より切り立たて面おもても
す槍を打入突合つひあひるが念ねんなり敵を突退つひひきけ引取んとする所は政宗の兵三
百計横よこあひより切て懸かりたるは上泉兼て直江が詞ことばを怒いかりたりあよ
一足も引ひきしと思ひ定めしむるは又合戦あひびきを始め火出ひつ計は戦いくさひうる敵
味方討うち者多し前田宇佐美を始め大剛おほごうの者ども數度切てかりし
政宗の兵三十餘人討うちりわりわる處は政宗の士大将石川彌兵衛いしかわのやぶ崗かた味
方かたをり返り又打てわり前田已下立おのりたりわりつ返りつ敵々あひあひは戦いくさひ々
り直江日暮なほかり進まりつり引ひくと下知しりしむるは上泉心得こころいし
し捨すて敵に向ひ上泉主水のりみづと剛ごうの者打取うちと名乗なりかけ死し狂くるひは數十
人切伏終きりふしふとと小く討死うちりつるを首かぶと金原加兵衛取かへいつりつるは上泉三十四歳

とや上泉主水と曹せうの真向まむかひに疎そ散さんるが志こころは上杉執
亂らんを立て敗北はいてとんが義光政宗勝かちる乗のりあはる形かたちと追おつりつる
川縫かわぬい殿村上國清四十計横よこ合ありわりつ陣じんを整ととのへひくつるを
見てふとつりつるは又取て返り連立つらなてととつり物ものつるは石坂
與五郎よとごろう蓼沼日向れいぬまひなた前田慶次まへだけいじ宇佐美父子物具ものぐ立たての箭や各おの々おの七なな八はち折を
りけ槍やりの突つやがめ刀やいばの如ごとく斬きり人馬ひとまも般はんとつるが
上泉が組ぐみの扣ひへり前まへを乗通のりとおり各おの々おの大将主水おほごうのりみづをとり殺ころしつる
の交まじりつるは大高七左衛門の士おほたかつりつる馬うまりて打過うつる答こたふ
る人ひとなりつる

○慶長六年四月伊達政宗奥州景勝の地を斬取んと百姓を聞者きこひり

てあつりつる伺うかがひつる松川ハ阿武隈川の枝川えだがわを伊達領いだてりやうの境さかいなれ

本條出羽守甘粕備後若井備中杉原常陸栗生美濃岡野左内五千
計りて守りたり政宗の國見峠を踰信夫郡より瀬の上の川を渉り
五千の兵りて梁川の城を押し松川をさして押寄り物聞も斯と告
る本條出羽城を出川を渡してや戦ふ川を前より半途を打んと
り処は松木内匠敵不意の利と謀りて押寄り味方川を渡りて待り
たりは政宗思ひふりて必引退くべしと川を渉らんとしてよりなり
とより栗生同心せむ此川中窪まり極め渡り事をやたりて政宗
を恐るふ似たり勇士の志はあはれく川を渡りて待設さんと云栗生
孫子ふ以少合衆是曰北とよりあり小勢もて無謀の軍とて大敵
の擒とならんへ必定なりとより処は甘粕備後杉原常陸もく米

る物見を出せとく猪俣主膳本庄殿右衛門井筒小隼人衆行て馳
歸る猪俣は政宗川を渉らんとより二人は政宗川を渡さん事半時計
りやあはれんといふ子細を問ふ猪俣敵馬の背を取む障泥をさぐり
羽壺を常の如く附けたりとより井筒本庄云我等見一呀も同くい
えれども政宗のど来り其間五六町計りやゆらん政宗川際を押寄
て其支度せん何の時刻と移るる且小舟駄を遠く引退くべし戦ひ
を持し敵かり政宗二萬の軍兵と帥き奇来り空しく引返りや
りやいとよりさむ川端二町計置て陣を整へ敵を待んとより岡
野切支丹を信じる人かりり南蠻人の贈りり角榮塚より胃と着
真先うけり川を打渉り栗生甘粕川を渡りて下知せんとも
布施次郎左衛門北川圖書小田切所左衛門等二十町計真一谷小川

は乗入打渡と宇佐美民部槍を横と残る兵とを押し立てて
政宗押来り先陣片倉小十郎透間もあつて切つて岡野四百
計真丸もあつて槍と打入面もあつてあつてせんせん戦ひなれども
大軍を取つてこれ左内手の者僅に打ちあつて引退く北川馬
の首と立直り小田切も向て唯今討死せん會津も残り十四歳ある
吾子を囑申よ是をわづらは送りてつらつらと程々緋の羽折と
腕を小田切も渡りせんが小田切若死よ一生を得たはたつたよ
送りてつらつらと羽折を腰よつたつた北川今思ひ置事あつて追
つて敵の中よあつて切死しつらつたつた是をわづらは送り合せ
火を取つて戦ひつらつたつた者多し政宗勇と進んて追つてつらつた
ふ岡野程々緋の羽折着て鹿毛ある馬よ乗り支へ戦ひつらつた政宗馬

をうけ寄せ二刀切つ岡野うへ願て政宗の胃は真向より鞍の前輪
をうけ切つたつた太刀は曹のまつたつたを半うけつたつた政宗刀
と打折つたつた岡野らつたつた右の膝口よ切つたつた政宗の馬飛
退つたつた岡野政宗の物具以外の外見苦つたつたな大将の思ひも
つたつた續つて追詰つたつた後よ政宗わつたつた聞て今一太刀で討
取つたつた大よ悔つたつたつた岡野の川へ乗入つたつた政宗又十騎
斗つたつた追つて来つたつたつた返つてつたつた岡野つたつた眼
の明つたつた剛の者の多勢の中へあつたつたつた岸よ馬を乗上つた
宇佐美兵左衛門十六歳松川の向ひの岸よ危く見へつたつた父の民部馬
を川よ打入つたつた栗生つたつた先よ川を渉つたつた者よ止せつたつた何事よ渡
つたつた名將の宇佐美駿河守の子息よはつたつた問ふ民部謀も心よ

り出ひあらん見られよ一子の兵左衛門向の岸よりとやうとまぬづく見
ゆき心も亂れとるやとゆひも終らん川を渉り打連て引返す粟生
陣を整へ待たけり片倉が軍兵を追崩し川に追ひつす
も大軍見ると内より重り攻寄り上杉勢の福島とて引退く
福島に至るまで行程の道十八里あり政宗のついでありあつて馬煙を立ち追
けり物具と道は捨す事敷とて息まじく行倒れける者あり
待槍の長き柄のり堪がくして多く捨するが青木新兵衛永
井善左衛門と

永井善左衛門世々徳川家よ仕へり小田原の城を囲み後より
たけりあつて蒲生氏郷よ仕へ其後上杉家よ奉公し
る剛の者あり奥州福島口より物見よ只一騎出たり

伊達政宗の伏兵六人起て取色しを四人討取り長篠よも太
刀打り首を取らり右の指は手負刀を取落せしを取らり敵
を追詰て又討取り物師なり其後其疵を問はば馬よらん
うりと答へり功よぬ人なり後御旗本よ歸
り仕へり御旗を司り善左衛門浪人より上州深谷よ閑居りてあ
りる時人のあつて瀬戸の茶入と秘藏せし下女取落りて
打破りぬ下女驚き鏡臺より五倍子を入る壺と取出
し是よりわらふ奉らんとい用よも立ぬものやれども是を
請取置ぬ後よ小堀遠江守見て手と打て是は唐物の肩衝なりと
稱羨し後よ公よ奉りしとせん板倉勝重懇ありし將軍家よ
御しを申さん御上京のより京へ来られし越

うば深谷を出て平安に赴く時浪人をもつちむらり名護屋は
 親族ありて立寄りける隙に俱にひける浪人已が刀を永井に指替
 の刀を取替へわけ落しぬ永井はんくちなく京に着て後死罪の
 者ありてふ試んて刀を付てまじく金色も見えずに
 研師双と付て此刀の如き刀の双曾て心は覺えぬとて斬罪の
 場より身をの者ありて切きけり此の永井はさび刀を切
 けり物に障る事なれば似たり能研と見きばとてさき
 物より銘に正宗と切たり本阿彌は見られぬ正宗の中より殊に
 最上の物ありて是も將軍家に奉りて永井正宗と号せ
 られしとあり

始りて大剛の者も馬を返して走りて返して

突りて後殿より青木は小犬あり馬に乗柄の短き槍ありて
 殊に乗まがり幾度と支へ戦ひたり甘粕備後上杉家より勝
 勇將あり白石の城を守りて小曾津は行りて跡より登坂
 逆心して白石を敵に取事と口惜く思ひて今日より
 引まがり取てて追退け勇氣とありて福島の城下の川を
 渡り時政宗の兵彌追詰てられ先より川に打入りて永井と後
 三刀切る永井度々の軍に戦ひ疲き大軍打渡す川音より此を
 志し青木の鳥毛の棒の出りて黒きわらひて乗寄て敵を
 追拂ひ川岸に打ちあがりて永井は斯とて驚きて従者に見られ
 ば三刀鞍も刀の痕あり永井は助けらるる一禮とて迷
 りて小田切に敵に取囲まありて討まぬと見えしを青木又うけ

寄て敵を追拂ふ岡野ハ旗あり立て静ニ福島ノ城ハ入甘粕栗生
 も引入らるる政宗やかく押寄らるる小殿の兵ども柵を踏て城に入
 らるる小青木ハ柵を越らるる只一騎ハ居る所ハ政宗馬を駈
 寄らるる青木十文字の槍を政宗の曹の立物三日月を突折し
 ば政宗馬は諸鎧を合せてわけ通らぬ青木後ハ政宗と聞て今
 下槍を突殺せんま口惜き事よとぞいひたるかゝる處ハ築川の
 城より須田大炊助長義討て出政宗の兵阿武隈川を前陣し
 此川奥州第一の大河なり須田はよく地の利とあり兵を二陣
 にもち須田ハ川上ハ打上りを見と政宗の兵二ツに分ち防
 らんと色やく所を十文字ハ渡り斬らるる敵敗北し物具を
 始め多く分捕せし中にも伊達家ハ傳へ幕と須田宇平次中村

仙右衛門奪取し須田今年二十三とれ武名殊にせし高く聞え
 らるる政宗ハ松川より後ハ敵出らるる聞引退く處を本庄越前又り
 出て川を渡り追うけらるる政宗敗北し信夫山ハ掛り引退く時
 景勝後巻ハ打出て新地ハ日の丸の旗山の上ハ見えし政宗は物
 もとあり仙臺ハ引返さるる後ハ政宗使と以て攻取らるる白石の
 城ハ幕と取換んと云送られらば景勝聞て白石の城ハ鋒より攻め
 らるる幕も亦吾士卒の骨折り取得し重幕も鋒より取返さるる
 らるる後小城ハ攻落さるる恥あり昔より名将ハ城を敵ハ攻落
 せし事ありはあはれ武具を取らるる事ハ弓箭と身の大なる恥を
 政宗我もさるる斯云わらるる笑はるる名徳院殿上杉の節ハ
 御出有る時ハ九曜の幕法華經の幕を履らるる其後政宗

岡野は逢ふ時松川の軍の有様語り出して汝を斬つて其の
物とていつともいふが岡野大将の刃の跡と存つて金糸は縫あつて家
の寶とぞんぞ存つていつともいふが政宗は見とて政宗悦び
其時岡野曾のまゝつらと吹返してけさあつて切ふ志とて申
うまゝ政宗色を褒めて物語と止らざりしや

岡野はいつか蒲生家の士となりて上杉家に仕へり富有なる人
まゝ儉と好と奢をみくむ一月の間二三度も金銀と山の如く積
て其中は臥るもぐさくさくを聞人たりてあへり或時岡野
いつか如く金銀を並べて見居たりしふ近きありの士あつて
を志出り方人の者ともあつてあつて寄つてまゝに岡野聞といま
や正宗の刀を提て走り行一日一夜其家も存て事なしあつし

い歸りたり岡野が馬取の下部大板金一枚持たりしと聞及ひ呼出
て汝が志こそやうく人ハ貴賤もつた貪りては義理のな
く事も心もつらうて叶ひがくすく心掛けしとて黄金百兩
與へり景勝會津は兵を起し時永樂錢一萬貫文を献上し
の親も深き人々はあつて黄金をもち送るる軍の志とて
人々のひびくはつたもつたも岡野は猿樂も舞むれとてまゝに
語りて日比の武備もつたもつた孫樂ども世のつらなる時諸方
まゝのつらなる暇あり今人々あつてまゝにわの者どもは
まゝに玩まふもつたもつた軍も臨む者生て歸らへ思つたも
生の樂もつたも思ひくわつたもつた云々又政宗福島城を攻
つたもつた木幡四郎左衛門百騎斗つたもつた城近く働さるる岡野并

據より見大物見ちなれども三陣よりうらうらと軍を心懸さし兵を出たへ
 らばとつひうらふ鈴木彦九郎よせ来々中より政宗ある一々いふ
 討取んとつひ尤うらうら兵を出し先陣二十騎計次の陣より
 とうつちかんと色やうを錢砲を打ち煙の下より左内一文
 字よ切て掛り遂に木幡を討取らば景勝度々の功を賞し誠信
 武功の輩は姓名をあらうらまし例より左内と越後より更うら
 う政宗三万石よりうらうらも舊主の好む忘まがうらうら蒲生
 秀行よ仕へ猪苗代の城より下野守忠郷の時死しうら金子三千
 兩正宗の刀を遺物に献し忠郷の弟中務も金子三千兩景光の
 刀貞宗の小指指よりうらうら年頃人よかりうら金銀の
 手形證書の大なる箱よありうらうら皆焚くうらうらうら

○

関ヶ原の亂ありて後東照宮本多正信を召て石田ヶ子妙心寺の内
 永壽院ヶ弟子より僧とありしを寺中一同して重罪の人の子をれと
 も幼き時より出家しける者ありて赦されしつひのつひに仰ありき
 正信より御赦されの有き事より治部は徳川の家より大功をせ
 ける者あり治部よりありき軍を起し西國中國の大名をあらうら
 一戦より打負ける故より日本六十餘州皆徳川家は歸服し
 治部が存立しよりかく日本は従ひぬま徳川家は大功を成さる
 はんのやと申うら東照宮汝が理屈もさるうらうら仰ありきか
 の僧御ゆるしんを蒙りうらうら岡部美濃守宣勝懇より和泉の岸
 和田より終りたるや

○

関ヶ原の亂の時越後より一揆起り堀左衛門督秀治より臣小倉主膳か下

倉の城を責り堀監物が子丹後守直奇坂戸の城をくわくと聞後卷よか
 け向うと敵引とくく坂戸を攻む如何あんと云々のあり直奇のど
 下倉を救うん敵此城を攻来らば敵の旗先をどふ見ず口惜く
 とりよりややく打出て下倉に向ふ小倉も門を開て切て出直奇後
 より一文字は突懸り一揆の長田九右京を打取く此告を坂戸より
 書くる時勝利を得ゆと書せしむるありしより直奇あざ笑ひ
 打すけは戦場の土より人々と云く出られしより一揆柿奇齋藤已下
 五千計猶山より前よ平田をあて陣しんば直奇昔太閤の前より
 允長老の孫子をもしと聞ゆるふ兵以正命以奇勝とより吾も
 奇と以て軍まきしとて山中數馬速水織部は馬を渡り直奇
 の六百計引合て林の中よ待居し一揆馬印と見て進み來り時林の

中よりとつてけ出直奇真先よとみと思ひしよ不意を討一揆二百
 餘討取く切崩しより東照宮御感状を賜り此年二十四才より後
 十万石を賜りし

直奇ハ秀政の長臣堀監物直政の次男あり十三歳より倍原ありし
 太閤の小姓よ召出され左右ともあきざら麗臣あり初三十郎とい
 ひうが後丹後守と稱そ太閤ある時茶室よ入て火をとり炭を
 入る時千利休の幽霊ありし來て黒き頭巾をわづり燈のわ
 せ座し居し眼の中より光生し息よ火を吐く左右ありし
 侍女恐きあふ太閤炭を入終りて無禮ありしとてとてとて
 利休が形退く座を太閤常の居間よ出丹後守とよんぐと
 物數寄屋よありし來りし直奇今年十五歳あり即

行時廊下の窓戸を閉てきて、さき屋は入て見まふ何もあらず歸りて
斯とソノ羽折とあつて、ふる利休の茶の湯を好みて世に名あり、天正
十八年秀吉南禅寺より黒谷へ出らるる山登りの道より女房の下部
より、あつて持せ山々の花をちりめく静よ来りしが秀吉の死より、人の
者と見て花の木陰に立たわかれ、つらつら計もななく美麗なりと問
ふ、小利休の女より、鴉屋に嫁し、今、獨住する由聞て宮仕へさせ
よう、とあつて、よひ出させ、小夫より、さき、後悲しみの涙乾くは、とて
従て、利休よ、まはせ、さき、小女を商ひ、つらとて人よ、いれんが口惜して
出さず、秀吉利休をよそ、いれ、利休木像を作し、大徳寺の山門に置り
大開山門の天子を始とて通らせ、人頭上よ、あつて、事無禮なり、且
茶の器の價よ、就く私あり、聞て、天正十九年二月利休を誅せられけ

利休小座敷の茶の湯と、け弟子の宗藏と常の如く茶の湯
終りて、さき、く、形見をわらうや、さき、後自害し、つらとて

○直奇幼少の時紙で、土で、さき、やうの物と玩ひ、人の贈る、し、此
の、い、悦び、い、さき、人、く、く、贈、さき、あ、小大なる、簾、入、て、あ、と
人々あやし、思ひ、さき、常、人、ち、を、あ、の、で、と、並、へ、武者押陣取
と、い、て、戯、ま、悦、び、い、と、な

○越後の一揆三條の城に奇す時道は伏兵より溝口伯耆守宣勝兵を出
して三條に赴く、世間太兵衛先陣せし、小川の原に新しき、糞のあ
ら、と、見、て、此、邊、に、兵、を、伏、置、さき、あ、ら、と、搜、さき、い、バ、伏、兵、駛、さき、逃、は
ら、と、追、う、け、百、餘、人、討、取、ら、り

常山紀談卷之十六終

常山紀談

卷六

東 京 圖 書 館

和書門

雜史類

三種函

三架

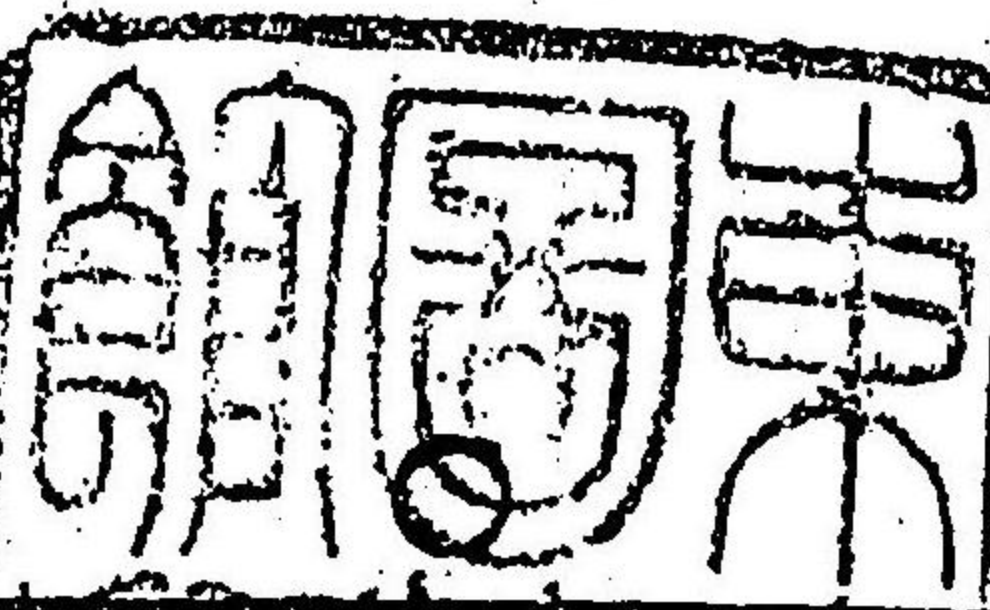
一號

一冊

常山紀談卷之十七目次

- 一 真田昌幸父子三人始末の事
- 一 西村孫之進武功の事
- 一 佃次郎兵衛伊豫國松前の城を守る事
- 一 大久保忠佐小三救橋城を賜ひし事

常山紀 卷之十七



備前國 湯淺新兵衛元禎輯録

房守昌幸ハ海野小太郎幸氏二十一代の末なり父海野彈正幸

隆信州真田一居る真田氏と称せ武田家の臣とあり嫡子源太左衛門

信綱長篠より討死せ二男武藤喜兵衛昌幸と云ふ長篠の後高坂彈

正五ヶ條の諫をすけり其一條より昌幸の兄の家をつぐせらるり

父の幸隆後一徳齋と号し昌幸信玄の近習あり十八の歳川中島にて

槍を合ハせたり天正十年勝頼諷訪し陣四方より敵来り時昌幸

吾妻の城ふこもられしといひりきども長坂長閑其謀を用ひて勝頼

郡内不赴きて死し國亡ひぬ北條氏政共を出し甲府を攻取らん

と死るとき昌幸徳川家より属し依田信蕃と碓日嶺に陣し北條の糧

道を塞く東照宮北條和平のひ上野の沼田を以て甲斐の都留信
 州佐久二郡不換らるべしと約あり是より前昌幸沼田に城を攻取て
 要害の地とせり真田ふ上田を興へ沼田をバ氏政に渡ればきう仰
 出さる上田ハもとより信玄以来真田ウ居所より昌幸に徳川家
 功有といへとも僅ふ上田と沼田を賜ハてぬ賞甚薄しと思ひて辞
 下りるハ沼田ハ賜り地ハ非吾鋒ふて取得なきハ故なり人
 ありへん事叶ひハすとテ豊臣家ハ属まべきよを云遂に
 其折かり秀吉東照宮の上京あり事を怒り此を悦び密に上杉景勝
 一真田に力を合せよと下知せられしバ千六百の兵を真田に許し
 應援とい東照宮真田ハ奸謀ある者ありとをより憎せしむる
 上無禮の答を怒らせしむ大久保七郎右衛門忠世鳥居彦右衛門元忠

平岩七之介親吉柴田七九郎康忠を將として七千の兵を以て上田を
 攻させらる昌幸城より一里半隔る加賀川を敵渡り時半途を打
 一とありひりる小甲州の浪人板垣修理と敵の半渡を討し利有
 とも三遠の物師どもあれ敵の後陣二の見は勝りんと云ひられ
 昌幸尤ありとて城に近き砥石に城に嫡子信之矢津の砦に矢津但
 馬とくめ置き寄手必し漆屋平より寄しよと引き受けて不意
 突く出んと謀り又城外小野山のかけ小郷民を伏置り寄手
 見よみて町口小押入惣郭の内横小路に柵とくひ違ひよひく簾を
 かけ其の蔭に伏兵を置鉄砲を打めく昌幸思ふ處に引受城門三方
 より一同に打く出たき寄手支一兼て崩しバ討とる者多し砥
 石矢津よりも切くめり郷民も合ひたき大久保十四五騎小

て踏止り戦ひ加賀川を引き取つて鳥居ハ高き道を退きり
 を砥石の兵喰苗んとて慕ひ来まば五六町計の間討つ者数多
 り大久保ハ鳥居敗軍を見く忠世唯一騎引返一第平介忠孝彦
 門黒き物具銀の揚羽蝶のさし物にて衆付く馬より飛下て槍を
 提く扣たる處敵押懸る中不も真先ある兵を突伏せし忠世返
 を見く松平七郎右衛門とさし引返一来まり平介ハ小高き處か
 とく一さま真田進み得以其の間僅十間計過ざれども忠世
 少しものひるまば日置五右衛門忠世陣の前を通らんと平介を
 こそ敵よ三ツ巻と付さるそと云りる日置いりあやまり味
 方そと心得て日置五右衛門なりと名衆く通る處を足立善一郎政定
 槍おつ取鞍の前輪を突五右衛門が従者槍を取直し善一郎と突平介

が前をませ通らんとすまば平介すつまきりれども従者槍を拵る平介
 に向ふ其の間五右衛門衆技一處を氣多甚六郎のがさし追さ
 まふ股のそづきを突其時五右衛門あり顧り川中島のか勢と思ひて
 危ふりりとソひけ抜り忠世平岩が陣に往て敵ハすばら不
 追懸来り我跡を詰りまあを切つりりいべいとソくども親言敵
 小勢なまとも必定近所伏兵有へとして進まば其間昌幸城引
 入りり此日酒井與九郎殿に敵北首を取らまば其日の一の功名な
 り翌日忠世康忠真田が枝城丸子を攻んと筑摩川を渡るを真田見て
 海野町へか出ハ重原を一騎打不相働く忠世鳥居平岩後を詰
 バ敵の中を取切討取るソくとも恩は真田引取味方ハ重原陣奮
 も城を出て陣一足輕軍あり芝土居とつと柵を結前田働ふ日を送る

あつて濱松より井伊直政大須賀康高を始めとして五千餘援兵たり
 さきども秀吉の下知ふより景勝大軍ひて上田の後巻まらうとの聞え
 有り諸将相謀りて陣拂を昌幸が次男左衛門佐信仍に幕つくと以
 大返しふかへし軍をべき物色を昌幸見て信仍を制して追ぎりけ
 り諸將歸陣の後昌幸大息ついで徳川殿ハ誠の英雄あり加勢を以
 る城を攻る色をあらりたる故昌幸其の謀不陥り防く心の心あ
 りて夜討朝ヶけの志夢ふも無りあり斯ををかりて不意に引取ま
 る事吾計の及ふべきふありと云り其後東照宮太閤と和平な
 りりかえ景勝の加勢の頼もなき信州甲州の人々を真田頼とて秀吉
 して徳川家へ歸り属せし音をアせし御許容あり天正十五年正
 月七日昌幸信州添志の小笠原右近大夫貞慶と共に駿府へ参りて

東照宮へ謁し奉る

東照宮も昌幸が武勇侮りて思召し嫡子信之を本多忠
 勝が婿おせんと仰らまし昌幸夫ハ聞あやまちならん本多が女
 を信之が妻おせ人妻さらぬ望みおけハまじや東照宮此事を
 太閤へ御物語有し忠勝が女を養うて今ハ己が女なりといせ
 らまじとてりらまじり東照宮使を以てあうくと仰送らま
 じりバ果して昌幸聞受たりと云り
 斯く北條征伐の事起まり天正十六年八月北條氏政の使として北條
 氏規聚樂へ参り氏政上京まべしといへとも上野の沼田ハ天正十年
 徳川殿と和平の時相渡さるべしを真田恣あり事を申て北條家志を
 失ひは早く安房守へ彼の地を北條へ渡りて其旨をふめさまらハ氏

政上京せんと申り秀吉聞き往年の事審み知る事なり北
條家土地の事能知る者を上京せしめよとて氏規を暇たりぬ翌
年坂部岡越中融成入道江雪大坂に赴き秀吉事の事を聞ぬ
ひて真田が上州の内北所領三分二并沼田の城を北條に渡し其の換
地は徳川家より真田に與へらるへ一同所三分一名胡桃城とも真
田已前の如く領せしめし江雪命ぜしきかく真田が方より沼
田を武州鉢形に北條氏邦に渡し氏邦其徒士猪俣能登範直を沼田の
城代とせしめらる人あり得失の辨なく名胡桃の城は真田が領せ
し事を怒りせをわかつて城を奪ひ取り昌幸太閤を訟へしは太閤
北條に沼田を得べし上京せしめしと約しあがり遅緩を怒らきし上へ不
此の事を聞くと氏政を征伐せんと志決し天正十八年秀吉師を出し

く小田原に打向へる東山道の先陣前田利家碓日嶺に至り上杉景勝
は坂本に至るは名胡桃を奪ひ取り猪俣に戦はせし城を捨逃落
りしは真田信之に後伊城に入る事を得し昌幸は去る天正十三年以
来秀吉の恩顧を得しはは大谷吉隆にヤシ次男信仍を秀吉の許し人
質に出しし其の後石田兵を起すの時真田父子三人は奥州に打向
りし途中に石田が使来りし秀頼公に爲し旗をあげし同心せしは
信州の故主君の地甲斐を添へ奉らせし偽りしは起請文
を送りし昌幸素より徳川家に二と心あきばさらば引返さしと
いふ信之は然るし内府智勇勝まさる人なりしりてりや
ましく討滅さるし思ひの寄さる事なりし諫ましの昌幸聞き入し
又一説は木多と親し厚くし石田にさしけりし由を信之

ヤセ〜兄弟の信仍女房れ〜引き父〜引ひ〜や〜や候
と申以又信之西國之與せ〜き〜人〜必軍敗〜其の時父と
弟との危難〜逼らんを助け〜家の亡〜様〜せん〜のひりきバ
信仍西國の軍敗〜父も又信仍も同〜戦場の土〜ん不
何〜〜助〜せ〜の〜き徳川家先年兵を出〜上田を攻〜時景
勝加勢〜其の報礼〜あ〜き其の頃秀吉公和平を取行
ひ〜武名をせ〜あ〜は豊臣家の恩浅〜〜唯
疾石田之同心有〜然〜凡家れ亡〜時人の死〜時至
らバ潔く身を失ひ〜を勇士の本意〜何條〜あ〜い
のち生〜家の亡び〜や〜ふせん〜云ふ事や〜争ひ〜信
之怒〜汝〜詞不禮〜既〜切〜捨〜見〜信仍〜

〜只今爰〜首を刎ら〜事ハ許〜信仍ハ豊臣家の為不
身を失ひ〜志ありとい〜冒幸聞〜兄弟の争各其理有〜太
閤世を過〜後此事の起〜必き秀頼公の為不忠
ふあら〜と信之ハあ〜信仍ガ〜の處吾思ふ所〜ハ
〜と共不引返〜信之ハ是〜心任せ〜とて別〜
とい〜り又一説昌幸云ひ〜ハ會津より宇都宮〜至て七日路
〜も日の岡此徑〜三日の行程あり景勝と謀を合りせ前後
り攻め〜んハ伊豆守俄ハ裏切〜バ徳川殿を召〜討
ち取る〜といひ〜信之内府ハ勇略百萬の人不〜あえた
〜味方利有〜事存も寄〜として遂〜兵を引〜恭正〜東
照宮信之を召〜安房守ガ片手を折〜心地す〜上軍不勝〜ハ

必信州を賜ふべき後の證をよき御刀に纏ひて之を断り賜り
らるといへば又真田兄弟の争は處ハ佐野北天と云ふ所又犬伏と
いふ所ありともなり

昌幸ハ引返つて沼田の城より信之の妻小對面せんと云ひらる小
信之の北比方聞ちらへば既小父子仇となり引合はるるに父
ありておとすも城に入ら奉りてまゝ中事思ひも寄びとて
本丸の門を固めさせ自ら物具取出し女房共皆刀を側置き置をて
しり毛の馬あらへし厨の土間をばあげとぞ下知せりまじり昌幸聞
て吾過ちあり人々能聞ゆ日本一とせよ云ふ本多中務女なりん
るよ弓取の妻ハかくこそ有るなり此婦人ありんてハ真田の家危
かりトといひらるとぞ昌幸夫よ須河に至り高間越りかきり上

田不かへりて台徳院殿本曾より登りせり時御使を以て禍を
まひらるるにありて降参せよと仰せ有りし昌幸聞て秀頼の
為小城を守りて攻めらば一矢仕えんと答へし又御使より石田
小西等已に威権を恣ふせんが為小なり企不及へり豊臣家の恩を
蒙り一人ハ皆背ちるを以て知べし猶降参るるに信之小腹切らせ其
の後城を攻破るべしと仰送りせられし昌幸聞て太閤恩深き人を
の背きけハ此人ヤ心の同トつらざる故あり既小子ありて信之父と
相違ひなきありて信之小腹切せらるるにや親の子
を愛するハ誰も同ト事なり一とも信之父とて小城ありて同ト
枕小討死せし信之を助くべきありと答へせしにバさらハ
攻めよと陣を寄せらる其の日ハ百姓の家小込入りし小柳原康

政真田今夜必も夜討をべしと物見を出し篝火を透間なくさせたり果して信仍夜討せんと支度したるまじも康政の設ふりり夜討ハせざりりて斯く明きバ九月六日押寄りし浅見藤兵衛只一人墮際に進こける處に打懸る鉄砲を朱ふ十二引の差物打さうき其の身もひいと折敷伏し味方の續くを待小栗治右衛門大音あげ浅見功名せうとて深入りし家世ぞと叫ハるを聞浅見立上がり汝が先をさせんやといふ門小栗慶ふ門を開きて討つて出浅見小栗得さりと槍を合ハまると左右の出し扉より打出さき鉄砲雨の降が如し浅見が從者虎若しソムソムハ剛の者さ刀を抜き槍の穂先をくぐり入り敵の足を難拂ふ浅見を痛手を負倒きしを虎若足を取つて引提持帰りりる小栗見小栗をも助けよと云ふ虎若聞て主人の先途

の為小こそ来たたまき他人を何ふりせんと云ふかひ負り引退るく浅見差物をなくさ落さまたりと覺取て来らバ生甲斐なくと虎若北ると差物を落さば耻なり槍を合ハせし落しをるハ耻小非むといひて念あく帰るり城兵山本清工衛門依田兵部堤の上り上がしを見り寄手三十騎計馬と並べりおろして馳よせひりと馬より下りて進り行齋藤左太夫山本依田前ふつと出名栗るを見りと均しく御子神典膳辻太郎介日なり合ひ入り乱きてたくり御子神ハさくひかき早よとて槍をかざり堤の中へひりりと飛入朝倉藤十郎中山助六戸田半平鎮田市左衛門太田甚四郎齋藤久左衛門きをひかかりて槍を合ハし依田朱塗の物具ゆる戦ひゆる深手負て倒きしを御子神辻依田を一刀づつ切つたりり山本も槍を打折り痛手負

あがら依田が屍を肩小くけく引き退りて寄手追つむまば城兵又切
つくりしを中山槍を合ハセ太田引ひてさし詰引まつめ射たり
クハ門不追込なり

太田後善太夫どソ小けり時上一人太田が許小来てて吾ハ真田家
の浪人ふて以上田の軍此時相手小成たる者あり其時射らまき一夫
を携へ来まると云ひ一ウバ太田の事ハ必死に小聞人のさし
ウなま有りて證不申べしとてまび入ま近まあり小笹瀬危太
夫として武功の有り一人をまびませて彼の真田が士小對面其の
人申りま上田の出入合なりと善太夫あやまき一番小出たる
ハ鬚の多くあり大男なりまきとソハバかの士より見届らまき一
まきハ真田荒右衛門と申る者なりと答ふ其の次の男ハふとりたる

男とりのまきハ何の充仲と申る者ありまき其の次なりとソのい
やくまきハまき一の男なりとソのまきハ無極と申る者
なりまき合明小見定めりれしとソのまき其の次まきありとソ
バ太田のまきハありまきとソのまき其の時この失あり射らまき
とて矢を取出まきの者ハ細野權之介とソの者あり其の後善太夫
申し細野を尾張の組付小ありとソのまき

まきども鉄砲をうら出以事霰の飛ぶごとく寄手の先陣地まひしと
罷りり本多正信下知しと城をバ攻や昌幸と信仍ハ中の手小出る
を牧野右馬允康成同く新次郎忠成とせ向うし其の間を二町計もあ
らん小真田父子八十四人手つみを打つ高砂の謠をうし小榊原
ふくまやつうかとりし小真先馬を乗出其兵二千計後ろを

取切らんとすま渡邊半蔵も鉄砲をうらけく進まは松澤五
 右衛門敵の付入心許さくいとく城へ入らざやと諫め真田高砂の
 謀を終らび引き入りり康政康成おしつてびびり寄せりるを正
 信うらび引き入事然るべうらびと制しりきバ引き返へる戸田
 辻等の七人を上田の七本槍と世の中をなす戸田ハ銀の鬮騷のり
 物辻ハ白丸四半と辻とソ小字を墨ぬく書を信仍箭文を射させ二
 人の武勇を称しり此の中山ハまよめたる馭法の上手なりとや
 後々依田を太刀付一二の論り辻ハ依田朱塗の類當せしとい
 ふ御子神ハ依田朱塗の曹着て類當ハなしとソ小牧野右馬允徒者
 を馬工郎ゆり上田小遣し様々ふり山本アあひ其の時の事を
 問ふ山本云此論有べき事を誰人ゆめせし類當をかきかとい

ふ人初太刀なり依田ハ類當のけさうせハ死場の槍下あれハ
 血不流るるを朱ぬりの類當と見たるあるべしと云ひしを聞て歸
 と牧野小語ア一は御子神一の太刀なきハまよりり
 かくて力攻小せらま人死傷せん早く美濃よ赴らせまふと
 と評定有森右近太夫忠政を上田のみさしと一徳院殿かこし
 をとらせま小神原殿せし真田遣不見く神原が有様吾を悔まり追
 うけくくひとめ一軍さんと云ひりる小真田が許小年老たる法師武
 者の謀由りき有りりるが康政あどの者いりて其の謀みりるむ
 古の兵法不帰師ハ勿逐とソ小事れいとくとめ追ぎりり
 東照宮神原ハ必ひかり引きまべさりの也と仰せらま一が後小引
 く御尋り神原承り御大将ハ城不遠ま山一かくて引きくと申て

臣ハ城下を真直殿仕たりと申せし、東照宮汝必去らんと思ひし、果一くたがはさうらうとぞ仰せらるる石田が軍やがまし、りば真田父子を誅せし處、信之此の度父と引分る、参りて父を助ん為、いさく大國を賜ひ、とも何ふ仕らんあはまき信州と以て二人の命、おかへ申度旨を申さざりや

信之并伊直政、榊原康政、不就く父を助け、あつりいへと申し、東照宮聞し、召し許容ありしと仰せらるる、東照宮殿不申し、信之父を助けんと、ソハことじり、あまさまども安房守不さし、きりきり關ヶ原の軍、おれくはたり、必安房守を誅せし、とて御ありさまの色なり、いさく伊豆守是を承り、又兩人不就く仰せの趣申へま詞、ふりかゝり、あんと存父を諫し、りども用ひざま、バカホ及びいり、

只一志、い所の、安房守を誅せらるる、先不まつかく申し、伊豆守、小切腹を仰出さま、いり御敵の子なき、バカあまさまと世の人も存し、い必入在世の中、あま伊豆守を誅せらま、いと云ひ、終りぬ、康政心得、い房州御赦免の事、康政申上り、事うせしむり、の義朝、い大小異な、豆州うま、いソハ、其の旨を申せし、うハ東照宮、台徳院殿も、聞し、召し入きられ、真田父子の、ま、いとソ、

信之、小信濃十二万石の地を賜り、昌幸、信仍、ハ御敵を蒙り、城を出し、紀州高野の麓、九度山、小引籠り、信仍、常不父と兵法を談し、天下の時勢を計り、昌幸ハ六十七歳、い九度山、不死、其の後、大坂の乱起り、小秀頼、信仍を招き、い此の比、世中、さ日、いかり、い紀州

ハ淺野長晟の領地まきハ橋本山百姓ハ真田大坂ハ行事ありしや
とぬる下知せしきハ用心まびハありしと信仍橋本山の
百姓数百人を九度山にまひたけり家ありて設け酒宴しとぬる
上戸下戸をいそひたけり名どハ醉伏し前後もあし其の時
百姓の衆来し馬ハソウハの物取付百人計打立ちし紀伊川を涉り
橋本山より水ぬ路マカハ大坂を行きたりし道ハハ百姓
ハミ至九度山ハゆきぬ残り女子と信仍ハ槍眉尖刀の鞘を
もつ一鉄砲ハ火をなをさみり押止る者ありハ忽討殺すべき休
を見せしなり九度山ハ醉伏する者ども夜明て見まハ真田ハ
ありしと問ハ昨日まハ有様ハ河内路ハ赴たたりとい
ふ欺きハ悔めとも力及り信仍大坂ハ至只一人大野修理治長ハ

家ハ行く信仍其の比難髪して傳心月叟とソハたり大野ハ士信仍と
ハありし何國の修験者ぞと問ふ信仍大峯より参りといハ折節
修理ハ居合せバと番所ハかくハ呼入き置まぬ

若き士とも刀劍カ物語まると信仍ハ向ひ汝ハ刀見せしきとい
ハを山伏ハ犬ねどハいといと出を袖ハ見まハ心ハ詞ハ及バき
バさハ脇差を見んと是を見りハ是も同ト事ハまハおどろい
たりとを見るハ脇差ハ貞宗ハ正宗あり人々あやハりたり
其の後信仍彼の若き士ハ逢て刀の目まハハらぐりたるやとぞハ
ふきハ赤面せしとぞ

修理帰ると信仍を見り大悦びと参らきいと禮儀正し
て書院ハハ入まハりぬ秀頼速水甲斐守時之を使ハ

金二百枚賜はり軍兵の事ハヤグて下知有るべしとあり既に東西の
軍起る小及びひと東照宮いっしよのしと信仍を降参させばやとて叔
父隱岐守信尹を以て此旨仰せらる信州小一萬石賜はりはひあん
とあり信仍同心せさきま又信州一國賜るべしと仰せ出さきり信
仍怒る義ハ人の道なり秀頼小二を心りし事存しもよりは重縁
くつる使をせし水かバ存まら旨りしと罵りし信尹を追ひ返す
り

或説小信尹小向つて天下小天下を漆へ賜るとも秀頼小背きく
不義ハ仕らト汗の出るとて肌をぬぎ小姓小ぬくをせてやぐて首
を關東北兩御所の前小出いべきとてうち笑ひりたりとあり〇元
禎按ずる小昌幸徳川家小服従し奉りて後關ヶ原の乱小及び小背

此と事二度小及び此義との小べりらざるし東照宮寛仁
小おちしませし故小再犯の罪を宥めさせり信仍其の寛仁小
何を以て報いしや心得らさば豊臣家ハ真田数世の君小非也若君
小不背乃義を論ぜバ武田家亡び後世をきく山中小かかれ
ハいりふり有るべし真田が論る處の義道小叶しとハリ小べ
めり世の人真田を以て賞称する事甚し故小思論を述り小及べ
る

大坂冬の陣小出丸まあり防ぎりり大敵の攻し時守固りりり
平小及信仍越前忠直小仕りり原隼人貞胤ハふりりり有る
招きめてありり原ハりと武酒盃教献の後信仍鼓をうち子の
小舞せ興りり信仍云ひりりハ吾必討死せん身の思ひ外小

なみん、〜再會する事よきと終ふ軍小及おべし落ふまゝ九度
山小かくれ居し一方の大將とありて、豊臣家の恩をくんやう
たし、何き小見申る鹿の角に立物の曹ハ真田家小傳へたる物とて父
安房守譲り與て、重孫の軍小ハ必きんせり物なき見置てせ
まろり、又命へあし、くも大介がぬもひ出もなく、空しく戦
場、土とあし、不便ふりと語り、きハ貞胤も涙を流し、軍小臨む
者誰り生る歸らんとあり、ふべきと答へし、信仍白河原もあま馬
六連、銀を金りて、きりたる鞍あり、せ庭あき、策まろり、原に見せて城ハ
壊たきたまハ天王寺口おかけ出て、馳めたり、下知して思ふ程軍せむ
やと存なき、此の馬おかまゆくと語り、又酌醉り別きり、果して
和平敗まろり、元和元年五月大坂おて、軍評定あて、後藤ハ大和口の

先陣、〜平野、陣しぬ、五月六日夜、信仍毛利豊前守勝永と二人打連
て、後藤が陣し、行明まへ、國分、山を踰、二万は軍兵を一陣し、て、関東の
旗本、一文字、うけ入、軍神も照覽候へ、兩御所の首をとる、三人は首
を、実檢し、そちふる、三の中、うとて、寂期の盃せり、後藤ハ六日の夜半、
打出道明寺口、うとて討死し、りり、毛利ハ藤井寺、陣を進し、處、後藤が
軍やふれ、関東の軍兵、二三十万も、あし、洪水の溢れ来る、如し、真田を
待とゆい、まゝ、来る、真田ハ兄の伊豆守と同心して、裏切らうと人々
罵り、りり、所、住吉海道より、赤旗おし、立馬煙ふ、立て来るを、みま、金
の、蠅と、りり、此馬、切して、真田、りり、毛利、陣、ゆい、さみ、あつり、信仍、菅田の
方、ま、す、め、は、さ、て、は、い、し、二、心、う、と、人、々、あ、あ、し、む、処、し、信、仍、場、上、し、
あ、が、り、鑊、砲、を、進、め、て、伊、達、政、宗、の、先、陣、片、倉、小、十、郎、を、向、て、討、て、か、る、信

仍真先一進てたぐい片倉が陣敗北を逃るを追て敵あま討取
り片倉金の鐘此差物して麾をとりり返す政宗の旗本此騎馬の鉄
砲もすみ来る奥州へ聞ゆる馬多き所すれはよき馬を擇ひて若き士
は衆馬上より鉄砲をつる立きを敵ひるむ所を馬の首を揃へて忽衆
破りかけみよして追南き軍界り未だ其間相去る事遠くしうは信
仍り疲まらぬ息をほげ胃を脱と下知しりまはな胃をぬりて休
し居り敵や近付しうは信仍まれば胃を著しりしうとそおれ
曹の緒をしめ槍の穂先をそろけて敵は向ふ政宗の鉄砲箕手なり成
てめり来り雨の降ことく打うけしうは信仍真丸も成てとてものぞま
ぬ所よ一足も引るりの共と下知しいとくと跪て聲々念仏ととるへ
力を合せととるへ信仍大音あけ一寸も引る爰も死後命と下知

しと槍を取てかきまが士卒一同立上りあめいて槍を打入とれは政
宗の軍兵大に破れ一支りなり崩きり此を世に真田が天王寺口北軍
とて大軍の騎馬鉄砲は打勝とる有様をつつと稱しり信仍士卒を
立固めらると毛利が陣に来る大に今年十六歳組討しと取とる首を
鞍の四方手は付手負とるが流る血をぬめり馳来るを毛利見て
ありれ父の子なりと感とりり信仍毛利の手を取涙を落し時刻遅く後
藤ら討死せし故謀空し成めり豊臣家の運尽めり所なりとりんへ
毛利と大敵は打勝し武勇は有様古の名將より多きりとりとぞ云
るるゆりる所は秀頼の黄母衣は使番乗来りと城の中より候へ
と下知せしし信仍猶赤旗を立今一軍せんと曹の緒を止め直
し勇氣殊といらめし見えたりり水野日向守勝成此を見てり軍

せんとして政宗よすめうろく同心の道なり越後少将忠輝より陣
を進められしが此も真田が陣よりあらんと曹を著め政宗の士大将
片倉小十郎忠輝の前より来り日暮近し軍危くんとりんばをりその
士どもりぎかりて討とん弱敵をあらますととりんば片倉それば
ひか事より候日本國を敵よりて軍まる大坂の者共を弱敵とりんば
や片倉が組の士三十人中二十九人の討死より是見られよとてつ
ばまぐ血は染るる刀のまがりたるを見せたり越後の士大将花井主
水正いぐまぐまきと軍奉行玉虫對馬より問ふ玉虫敵の二の身は勝を心
がけ候かりて軍は利候まるといひてためひりり
忠輝大坂をつくまきやと評定決せん篠瀬左大夫足輕をうけひり
らひてくひとむべし軍をさせしよとまむ玉虫僅なる足輕といふ

てゆるより敵の大軍をくひとむまきとりんば篠瀬あまへのちを
事へ申す六尺の大男も是のうらま踏めまぬの行歩ひまとも
の也人数少りとてつけられぬ事やあり玉虫地の利ありぬ所
りて日ゆきしよりゆきりりの合戦の危き物なりと押とむ小野
能登守の判官殿三草山をうらまの合戦のちぬ國の夜軍なりや
りゆ皆川老甫小野能登守花井主水篠瀬左大夫ハ駈らんとりくと
り玉虫對馬林平之丞ハわらめて論決せさり中より大坂方あぐくと
引取りともりりり
真田が陣より手々に扇をあけて招き何とて軍より人ぬぎや聲やと呼
りりり猶かちらざりし信仍ちらうの兵を攻め關東武者百萬
もあれをのこ一人ゆなりと大音罵りて引取りを東照宮玉虫

林道春は異子六國の風を説く章を讀み、めづり玉虫を逐出さきり、此玉虫の甲斐の武田家まで物もちる故軍奉行なり。秀頼の出馬はらんおくれよりさあくる七日の軍に信仍兵を出し、秀頼の出馬をすしめんと、免子の大坂を城とし、りり大助今年十六、及ぶまで片時ゆかしくを離れ候り、今討死のきい逃り、人のりもんり口惜く候去年母上よりまうせ奉り、後文のなかりは、はらへく相見ん、恥ろつり、なきとも合戦の場より必父うくと同一枕に討死せし、尚より名こそをり、これと誠めらき、とひひり、信仍城中へ歸きといふも、秀頼公の御と免たり父子とも、どてゆのうるや、やがて冥途へ逢へきをあら、の別を惜むこそ口惜りせと、城よりあきとて取つ、まゝ手を引き放せば、大助名残をり、げえ父を見まき、冥途にてこそ

とて引返り、信仍大助を見おくり、て落る涙をおさへ、昨日、日、誓田より痛手負い、よとる体の見えさる、はよも最後、人々笑ひ、せと心安し、とひり、る、と、や、わ、り、て、大坂の軍敗せり、う、の、信、仍、討、死、し、る、を、首、を、は、越、前、忠、直、の、士、西、尾、仁、左、衛、門、取、り、し、誰、とも、あ、ら、ん、真、田、信、尹、馬、を、乘、り、打、通、り、此、を、見、て、其、曾、へ、見、知、り、と、ぞ、真、田、左、衛、門、佐、ち、る、べ、い、口、を、ひ、り、り、見、よ、向、齒、二、枚、關、て、有、へ、き、と、い、ひ、し、信、尹、が、詞、の、こ、と、を、さ、て、こ、そ、左、衛、門、佐、と、は、あ、り、て、り、れ、彼、曾、へ、原、は、物、語、し、て、見、せ、る、な、り、方、箭、と、る、身、へ、お、も、ひ、出、の、詞、か、わ、や、云、お、く、へ、き、事、は、こ、そ、と、ひ、ひ、あ、り、り、大、助、の、城、中、へ、入、秀、頼、は、従、ひ、て、蘆、田、曲、輪、の、矢、倉、よ、こ、り、り、て、父、の、事、を、尋、ね、り、り、り、討、死、せ、し、と、聞、て、そ、れ、よ、り、物、も、の、を、母、に、か、こ、し、賜、り、り、り、水、晶、の、珠、數、を、首、を、か、け、秀、頼、の、自、害、を、待、居、り、り、は、速、水、甲、斐、守、大、助、へ、向、ひ、て、組、討、の、武

勇たぐまゝにあらまゝに痛手負せしと聞ゆ和平よて君は城を出させぬふべし真田河内守信吉の方へ人をそへて送るべしといくとりちつとも動くに寄手矢倉を取巻し時速水戸口より立出て大助が有様をかつり武勇の血脈おそろし記者たりと云しとる終は大助も矢倉の中より死して父子同く豊臣家の為は亡びたり

○大坂夏陳は真田信仍と伊達家と軍する時伊達家の騎馬鉄砲をりち立これに玉の飛こと霰の降が如く信仍が軍兵とも折りきて槍を敵の方へさし向くく居るは西村孫之進とりふ者くきく味方此屍二を重祓て肩くして居るは至一来て二の屍をうち通し孫之進の肩は傷たれれともり手なり槍を握りたる左のく乃大指こそをぬくて氣味悪く覚え残る指四本より大指をきり込てくくたり全身の

危き事ハもまきて大指の先の斯れごとたハ怯る故なりんと思ひて左右を見るは皆志うしとり又かくくは並ひ折たまきたる者王の中る音甚強くひくきて我身は中りたるうとねえしと後人よりたりはるとぞ此時孫之進伊達家の秋部甚平とりふ者を討取りきとも其姓名をきくぞ落城は後孫之進いまだりうきの家より止つりて江戸よれりむきみりりり相知る者の方へおたても語きる時客来きり主人西村が事をかりて大坂より事逢する物たりとりふりの客ハ伊達家の士海道林左衛門とりふ者なるが誰の陳よりおせしと問ふ西村真田左衛門佐が許し有りと答ふ客の云さてハ五月六日の戦にて此事ちるつし具に奉り候がやと問ふ西村聞てさる事して候を許とも尋もよ付て申す伊達家と始の一戦終り後軍殊の外をけし

伊達家の陳を七八町計も有らん追うてとる處は三十人計取てかく
折るか水より某も三人槍を入候ひき某が槍の相手は間より隔り
てかけ入候人を初槍よりとらみ外のきを突損ト二北槍は草摺の間
突ても倒し首をとんとせしに歴々の人々や候ひらん從者と覺
しき者二三十人も取巻候て手よく幾刀ともありき候皆具足の上
よて手を負ぎ候ひし槍よく腰骨をけり水倒きて絶入せりよりい
えは候後又承り候へば真田が惣軍さつと押かり候故に是ら首を
とれ候由被突伏する槍の相手の定めてたけのりまるとるるる
いと存る也其後少一人心地つき候は馬より称右衛門と申者これなど
の手よく弱るとり事やあると云て跡の方へ帰る音やうに耳に入
ぬ見捨て逃たるらと思ひしよ又来て腰の手ぬぐひを水より持来

り口よまがり入とりも志氣付とるを称右衛門肩にかけて城中
帰り翌日も其旗故働く事より戰場より出はして思はるる存命候と
りく被容聞て驚き初の槍を合せ候は士大将秋部刑部と申者より其
間よりかけ入るとる刑部が子甚平とりし者より御物ごとりと疑
候甚平をは陣屋に連帰りよきとも死しぬ察せしれ候通一陣の大將
も候其日武功の證人よ我等立べきと候其あるしをまめとせん
とて右に次第を書花押を加へて面村よあへまて菅田以来の叅會珍
りき縁かりとて互に物ありとて別きり西村後池田の御家芳
烈公朝臣仕へし

○ 佃次郎兵衛十成の加藤嘉明の左に先手の士大将なりかかしまの船軍
も十成敵船に乗移る時敵剣よく口中へ突入れたきとも少しもひるまじ

猶飛込りるを捧て曹の上を強し打し海中へ落入とせし水は長し
これバ泳きあつるを役者熊谷覚兵衛難刀をさし出取付直に敵船に
乗入て船中の者ともを撫切りしりりり嘉明船あまき乗取れし其
かり関ヶ原の時嘉明の伊豫の松前を出て関東に打向ハしし十成
堅固に守せしと下知して松前留守居より毛利輝元の兵村上掃部能嶋
内匠曾根兵庫守戸善右衛門等松前をとりんと支度しり能嶋村上の
河野の一族なる故招らざる人々従はん豫州を攻らん事掌の中
ありと評議し豫州の人平岡善兵衛とりける者を郷導とし三千餘をい
まわて豫州に打向し使を以てとく城を明渡させし遅くは踏潰さんと
松前へ云ヤリりり城代加藤内記佃と相謀り先敵をたえりりて
子細く城を明け渡れし然ししも妻子をかこつてける間を待せ候へ

と返答に左も有りと悔りて三津浦に上り民家を陣し待居り大
洲の城に藤堂高虎有て加勢をさし向らせし松前城中の人々より
てびあつり十成獨同心せん今敵大軍を押し寄たりしりり謀を設
け一戦し義を守らん予箭取者の法也城を枕し討死すべし勝利
を得ハ生前の面目なりたとへ勝たりとも人の救よりて運をひら
たりといをせん事口惜るべしとて禮義を正しくし辞しりりり此
時國中一發起り三津浦に酒肴をゆくはし十成聞て双方に勝負を
窺て見合せ居る黒田大溝永田村の百姓小ざし記者四五人呼寄妻
子を質し取り金銀をあつり云ふくめ酒肴をもとせ三津浦へ遣し
嘉明近年松前を領し仕置置しりり百姓とも困めり河野一族の人々
國に入りぬん事百姓の安堵なりと悦祝し申にたり城中はゆるりの者

候て具承り候へ嘉明関東へ出陣軍兵を拂て連れりゆゑ今残りと
 ども者とも多うに大うと老衰病者一人も軍までさ者う一佃
 十成も大病なり銘難も乏く落支度の外更なや逃去らんと口々
 云せよまハ安藝の士大将さも有べしとて拵あとりりりを彼百姓一
 人立帰て其有様を告知せりぬハゆゑ今夜風雨の終は一夜討ま
 して嘉明の貯へれり白布を胸肩衣に裁縫配りゆゑ十成ハ
 背に松の字と墨を書てあうしと合詞を定め首ハとるし見
 の音を聞ハ勝負を止て引れと約束を定め慶長五年五月十八日戌の
 刻に打立り忍の者帰りて今夜ハ村上陣所集りて酒盛の半なり
 戀山の濱邊に張番の足輕松前北あきし置りて告る十成打破りて
 通らんハ安りきども途中に滞りて三津浦へ聞りハ謀いとづし成

づしとて道を替江戸山を越て子の刺計に三津浦に寄せ所々の民
 家火をかけて切て入りは大まきあきて物音も聞えり十成薙刀
 を提真先に進みり掃部敵寄りしと何程の事有べきとてわけ
 出多を夜討の大將佃次郎兵衛なりし名衆て掃部をつき伏せ敵あま
 切しひ貝を吹立て軍兵をまといちうくと引取り掃部を始に内匠
 兵庫り討せりぬバ引退て久米の郷如来寺に揃り翌十九日十成又
 あ寄りきバ如来寺も支へり道後山に引退く十成も深手数多負
 て日ハ暮ぬ松前より道後山の安藝の人々近郷の百姓を相従へ
 刈田焼くしぬし松前北城を攻んとすると聞入りしハ九月廿三日
 加藤内記道後村へ押寄せて相戦ふ十成ハ久米の戦い手負て出きり
 うと重なり安藝の加勢来らば始終いり下り勝りき今急追拂ハまら

後日、事覚束なり、手痲を痛く、城中に死ん、敵に向ひ快く討死せん
とて、城下の町人、近郷の百姓、二百人計あり、免具足を著せ、妻子を質し、
りて、帑旗を指せ、十成、引具して、道後村より、け向へ、味方是の力を得、
戸平岡に、役ひよる一揆、ちりく、よる、りき、終、風早の浦より、船に乗
藝州に、引退、なり、関原の後、嘉明、松前、に、滯り、て、戦功を、撰り、て、夜討
し、首と、り、ざり、し、り、十成、村上を、討取、る、り、明り、り、き、ど、り、其功を、い、
に、生捕の者、に、た、ら、め、る、り、村上、陣へ、先、ど、ち、て、切、込、る、り、人の、白、衣、
に、背、に、松の字を、大、き、に、書、る、り、が、難、刀、を、て、村上を、突、伏、し、を、間、近、く、見、
り、とい、ひ、り、き、へ、嘉明、十成、の、功、を、り、て、松前を、と、り、き、り、殊、は、安藝の、物、
主、三、人、を、討、取、大洲の、加、勢、を、辞、せ、り、事、勇、と、い、ひ、忠、と、り、ひ、き、り、き、り、と、
て、太閤、より、賜、ひ、り、る、り、物、具、に、感、状、を、添、て、浮、穴、郡、久、万、山、の、庄、六、千、石、を、與、

へ、り、れ、り、慶長十八年、嘉明、温泉、郡、勝山、に、城、ヲ、築、き、松山、と、名、付、松山、の
北、に、別、に、一、郭、を、か、ま、し、五、矢、倉、を、あ、お、り、十成を、置、き、ぬ、元和元年、大坂の
軍、も、十成、嘉明の、嫡、男、式、部、少、輔、明、成、に、役、ひ、て、淀川を、渡、り、城、兵、を、付、取
り、り、同、年、十成、関、東、に、召、せ、葵の、御、紋、に、時、服、を、下、さ、れ、ぬ、寛永四年、嘉明、奥
州、會、津、に、移、り、て、十成、一、万、石、を、あ、ら、れ、り、寛永十一年、十成、病、お
ゆ、く、子、共、と、も、を、集、め、吾、若、り、り、より、戦、場、に、出、る、事、度、々、り、て、痲、を、蒙、る
事、十、三、ヶ、所、就、中、豫州、久、米、の、合、戦、に、鉄、砲、頭、の、石、を、あ、ら、り、て、猶、其、鉛、皮、の
中、に、あり、然、せ、と、も、運、盡、さ、れ、ハ、死、せ、り、て、老、年、に、及、ん、で、病、の、為、に、死、せ
んと、覚、ち、る、り、是、を、以、て、思、ふ、り、方、箭、取、身、へ、火、に、お、き、り、る、り、び、ま、り、る、り、志
あ、る、り、べ、う、り、れ、り、り、り、是、を、残、さん、と、て、剃、刀、を、と、り、て、皮、を、破、り、鉛、丸、を
とり、出、り、て、前、に、置、き、三月二日、八十二歳、に、端、座、し、て、終、ま、り、と、き

○関ヶ原の亂治りて後大久保治右衛忠佐は二万石賜ひて三枚橋北城主
より一渡邊忠右衛門御近習の人に向ひ治右衛門を武功の者と思召
りし此忠右衛門は逢て逃りしと申るを聞し召治右衛門を召ま
先年三河より一向宗一揆の時忠右衛門兄弟方を持其餘あましく鉄砲を
持とる者七人より一人立向ひて相手りけの勝負ありハ半ばの程を
知まへたは多勢の飛道具は吾一人かりて大死せんきとありんと大
音は詞をうけて引退きとると聞し然るは渡邊めがごとく無理をい
ふ男はひとりありけりて置まはる必此後聞ぬ体もてありとぞ仰
られり

常山紀談卷之十七終

常山紀談卷之十八目次

- 一 細川幽齋古歌を書て忠興を諫りし事
- 一 本多忠勝功名を論せし事
- 一 井伊家の附人連署し直政を諫りし事
- 一 堀秀政を名人太郎といひし事
- 一 大久保忠隣忠直の事
- 一 天野康景廉潔高國寺城を去きし事
- 一 井上正就駿府へ御使の事
- 一 東照宮諫言を容めし事
- 一 三河國矢矧橋を修造せし事
- 一 山名禪高敝衣を着らし事

東照宮禮を正しむる事

駿府城中へ水を引くんとせしむる事

東照宮御中指の事

金の七本骨の崩の御馬印の事

加藤忠廣物語并飯田覚兵衛の事

前田利常戦死の士を吊りしむる事

黒田如水遺言の事

本多正信加藤嘉明を論せしむる事

安藤直次先見并本多正信遺言の事

台徳院殿御行状の事

林道春格言の事

藤惺窩秀吉公を論せしむる事

紀伊大納言頼宣卿諫言を歎びしむる事

由井正雪及逆の時頼宣卿出仕の事

水野重長諫言の事

松野惣太郎前田権之丞賞せしむる事

佐々九郎兵衛經濟格論の事

不破彦三武備の事

井伊直孝衣服儉約の事 附戦國の時質素なる事

永井尚政執政の用意を直孝も問ひしむる事

中院通茂公幼宮を教訓の事

松平信綱恭敬の事 附信綱幼年奉公の事

常山紀談卷之十八

備前國 湯淺新兵衛元禎 輯録

○ 細川忠興諸事嚴正も過ると父の幽齋も告る者あり、あそくくを 忠興の長臣を呼て古歌二首書てあこころる。

あふ板の園のあふのきとゆくちひるるぬる
此歌のころを察せよ

まこもまつのくもはるる海をよるあかぬあまをさくらるる
此歌のころをよる思慮せよよと忠興のいと教訓せよ
きくらり

関のあふの歌ハ古今集よる人きくはまとも子の歌ハ詞
花集俊恵法師のうらめしき

○ 或人本多忠勝も思慮ある人功名をとどけり思慮ある人功名をとどけり問ふ思慮ある人も思慮ある人も功名をとどけり思慮ある人の功名ハ士卒を下知ハ大きある功名をとどけりあり思慮なき人ハ槍一本の功名もて大ある事ハありと答へらむと云り

○ 井伊直政壯年銳氣甚ク一ツク東照宮よりつけ置き一某以下連署して諫書をさぐぐり一其の中も人ハ必向ふざいと事事を思ひ設ぐるが然るべしハ臣等が前の主君の事をやも如何なきども信玄ハさうき時より一ツと一々心より善事ハあき人もさくくども常も越後の謙信を以て向ふざいと謙信もさるべきと信と云ん

○ 合戦五度も及びくども大ある敗北ハせまじい殿も本多中務大輔忠勝を以て向ふざいと勉めておとととととがみぬひはへり一いついへより進退する良將と云ハ中書相もあひて覚えたりと書きさうり云り

○ 堀久太郎秀政後左衛門督と云ハ士より下部もいゝまてはく上も下の情をつくまを第一も専ら心づくまをくりくまをば下も恨る者あり奉行の従者と荷を持者と輕重を争ふを聞て其荷物自らありくけ往來一我力ハ彼者よりまをきり然るまも一里をより負くまをバ勞まきり持事あてんととつふハ尤ありと決断せざる或時武者押まをこり後まを

りくるを尤めくるが秀政自ら旗を肩て試とさして吾乗とる
 馬の驛よれた故あんとて驛よるとき馬も来るときは旗さし後ま
 ざりき世も名人太郎といひくるはく下をつらふ心を用心
 らせし故もことごとく入のひあつり小田原陣中も辛せらるる年三
 十八ありとらわ

○

大久保相模守忠隣ハ忠貞の人あり関ヶ原の時台徳院殿木曾
 路より攻のぢせぬひし石田敗北の後御着陣ありしを
 東照宮御對面よりまさば忠隣近習の士を以てアとき事のみ
 とり中々口もいひ出さまじびとつを聞きてさうば直よ
 中さんとき座を立ちくるをさうば先アて見んとくくしとせば
 色を變トく内に入るぬひいダや有て相模ハ帰りくるくと仰

せあり猶待居て退んくきハハクびとアせぬあくまぐ剛直の
 者ありよの空しく帰らんとて召まかり忠隣御前も参り
 て先何とも言出さず涙を流しくまじぶを身んつらよと仰せ有
 り忠隣此度上田を攻めゆて道も遅留のゆひき上田を攻めハ
 ハ忠隣と正信があつたごよハ二人の中ち一人ハ召出さき罪を糾
 させぬあづきよていさハあつて不和も及ぐせぬあ事ハが事よ
 くとそり過一年大軍りく攻めし時由真田が智勇も拙き
 りひき上田固くとも遂も攻落まきまきをまてくのがせしひ
 り関ヶ原より石田今もあつ支へあハあど戦功のあつるべき
 り石田ゆりく敗まて手を空しくあつぬひね君萬歳の後も日
 本を治めぬあづき御嗣も人の悔り奉るべた事をあつぬあハ

怒りひらきしつて忘れしせめゆもやと、嗣君も自害をすしめ奉る
 べーとやとされし、汝が言無礼ありとて立せぬ所をわと
 ども忠隣がや處理あつて聞し召入せらるる正しくしむ首
 を刎らるる、憚る氣色あつてせしむ、聞し召し入せらるる
 汝がゆゑ所尤ありとてやがて御對面をせしめ、ぬ忠隣へ相
 州小田原の城を賜つりし、慶長十八年切支丹を改る仰
 せを蒙りて京都も赴き、謀反の志あるより、訟へし者
 あり本多正信忠隣へ惡逆の志あるより、やとせしむと世もやせ
 しが忠隣を井伊直孝の領國佐和山にちちめ置まされ、板倉
 勝重仰せを兼りて忠隣が旅宿を行折節忠隣を圍み居し、
 りくくへの人殿を流罪の爲も、板倉來りしむるより、云ひなき

ども驚く体もあつ、勝重も逢仰を兼りて更も恨の色もあつ、從
 者大に怒り、諛言もよみ、流罪もせしむ事口惜き事あり、切死せん
 とのひしむ、京都のさきぎ大くとあつ、二條の城も門々を
 守りたり、忠隣武具を繩もてりし、げ勝重もさつたり、くば
 京都のさきぎあつ、ぬ夫より佐和山も行く、直孝
 よくしむる、りやさき、がある時、開くべき旨、直孝兼
 りて達し、中さきやと語らし、忠隣理を正し、やさん、ふ
 聞し召し、明らからるる事、必定あり、さう、諛言を聞し、召し、無
 罪の者を流さき、過ちを人あつ、君の非をあつ、此忠隣
 が志もあつ、げ、朽果る、つ、の、惜
 直孝感服せしむ、り、忠隣つ、の、あま

りも忠臣記二卷を作らざる事

○天野三郎兵衛康景八天野遠景が苗裔りて百貫の地を領し来りて東照宮瀧坂ありせむひ遠江榛原郡を切取り仰出させし大剛の人あり後駿河の高國寺三万石の地を賜り駿府の城經營の時竹をうせ積置足輕も守らせし御領地百姓竹を盗みを見咎めて斬殺を殘る者ども逃ちりて代官井戸某も訟へし井戸百姓を殺しし鮮死人を出せと天野もいふ天野盜を殺し事罪あり守る者罪ありと先天野罪も行つるべしと云ひ々々井戸訟へり東照宮足輕を誅せり仰出させし天野始の如く申せしを聞し召天野ハ不道の志をなす者ありて子細ありんと仰せし

者も本多上野介正純天野も逢て仰せをいむむハ臣とる者の道もあはれ臣とて君命を養らざる事やあると云ひけり天野さくハ臣とてハ苦しむもゆをトとつあまも三万石の禄を辞し慶長十二年三月二十九日高國寺を去て行方未だ成る程經て大久保忠隣尋ね出一年ごう親りし小田原の某村とつ所は隠し置とてり罪なき人を殺し忍びむ三万石の禄をまて隠し志を人々稱しあり

○台徳院殿太田某も五百石の禄を賜りし時太田折紙を擲りて退出しを死罪と思し召したるも井上主計頭正就殿府より後罪を定めしと申せしとて井上駿府も

参りて東照宮より中を聞し召し泰平久しくべき基あり太田ハ誠し無禮あり九賞罰中らざる下の恨るハ常の事にて太田も無禮といひ知りしん巳が身をすくし諫る心あるべし臣下の直言して諫る者ハ怒る途て刑罰せしむ家を亡し大軍の中より入る者ハ多くハ身を全し功名を立る故昔より諫臣を忠の第一といひ然る今太田もあつる禄賞中らざるやと汝を以て問はる事政務も心を盡さるべき泰平の基と謂はる汝もものごとくせん事ありこそ三河まで池の鯉を鈴木久三郎が取ひ煮て喰ひ信長より賜ひ酒をもとせよあつるふとあつる飲しりき吾怒り眉尖刀を提鈴木を呼し鈴木肌をぬき大音をたが

魚も人を替る不道りて天下の旗揚んとし思ひもよしと罵りし時予鈴木ハ詞も屈伏し内に入りつる思ふも走りの者池まで鳥を取り罪しとせり置きを諫ん為らんといひ心付て走りの者を赦し鈴木を近付汝が志返る悦しきといひしを鈴木涙を流し密にすべき事を今戦國の時あきば手あつるがよきと存し無禮の詞をヤセしあつる仰せを羨りて辱さの身もあまらうといひしや今大田も三千石の禄をあつらきよとて井上をさめぬ御刀を賜つるし江戸も帰りてつるし太田も禄を増賜つるし涙を流し喜びたり台徳院殿井上も汝が詞もより孝行を知り賞罰の道をきまへといふと仰せ有りて左文

字の刀を賜りたり

○東照宮濱松ををりませし比ある夜本多正信御前も有

る誰人よりてありけん 姓名を懐より書を取出一諫め奉る

べしとてより存する事のゆて書いものごとせむ大

よろこぶせぬひ夫よと仰せ有りくまむば披きてよとくち

一條よと終る度毎よりあぐうせぬひ尤ありと仰せく

終りくまむば汝の志感するも詞ありこれより後心置あ

よ返まむも神妙ありとくり返一仰せくまむば忝きよ一

て退出正信居残りて只今諫めませし事用ふべき事み

かとも東照宮大もくきくせぬひいやとよ巴り過

は志くばりて過るもの之國を領一人を治る身より過を告知

せ諫る者ハ鮮く唯諷ひて主君のり事道はくひてもさ

はりそとと詞を返り人をあきぐう一諫をせむ一人の國を

うしあひ身を亡一後世の笑ひ草とあり一多一多一只今

日をを諫一者日比心を盡一見及ぶ様も付き諫んと思ひて

書ある一時もあるば見せんと思ひ居たり一志何よと

へんやうあり其の用ふべきと用あへうぬとありあ

く唯彼が忠心を愛する人とも仰せくるまて或夜の御物語

九主君を諫る者の志軍も先づくするようも大に踰まされ

り其の故に戦る臨む一番も進と出るハ素より身をす

の事あきくも必しも討死せり又討きたりとて後世よ

名を残一死後の名もあきくあるぞう一幸も功名きと

〇 恩賞して家富子孫栄るくまきび得有て失き忠あり諫
 然らる主君不道して善をもくむすり出て直言する者
 十も九ツハ刑罰ありひ妻子をもちぢり果る様も成行ぢ
 う失ありて得なき忠あり武功ハ名利の為るもあるべ
 諫言ハ聊も身の為をわめ心ありバいつて主君の前もて直
 言もぐき唯人も君ももの賞もぐきハ諫臣ありてぞ仰せ
 ありける

〇 前羽の橋水は壊き造りて仰せらるるも兼てより松
 渡もまぐりて人の有りる幸もいふ松渡よりいふと
 中を東照宮汝等末を知て本もつて賞をいふハ民の為る
 り往來の旅人を苦めんハ吾志もあつて又要害も其もつて論

〇 唯國民の和と不和あり險をこのとて敵をせむ
 八道を知ざるありとて橋をまこりてせむひたり
 〇 つつきの時の事もや山名豊國入道禪高古き羽織の所々敵を
 ころるを着て東照宮の御前も参らるるもそ身もいつて仰せ
 有りけるハ萬松院殿より賜つる物もてゆと中を聞て召
 舊を忘るる本も背りぬ者ありと御感有ける

〇 東照宮大度勇略もをそりませし事ハ誠もやさも愚あり
 中もも禮儀を正させむいふ今川義元討死の桶狭間を
 御鷹狩りて過させぬ時必御馬より下させぬれハ御
 幼時義元のおもを思召し出さるるの事ありける上杉景
 勝も途中より行逢せぬ時輿より下させぬ是も父謙信の

よき事を思召し々の御事あり

○駿府の城中の池も阿部川の水を引き入きよと仰せ有し水筋も小き寺有るは外の處も引移さんと申すを東照宮寺を移す事を定め水を入るも及べと仰せらるる此布どの寺移しはせんといふ斗の費のいづきといふは大なる憚事あり田の為も水を引んら左あるべし吾庭の水はあぐさともあり夫も人を勞する事やある無益の事地を捨るハ敵も取きしるも同ト百姓の苦もありと仰せらるるぬ

○東照宮御指の中節とことあり年老させあひてハ屈伸しぐさくおをい是ハこそき御時より數度の戦ひる初の程ハ毫もて下知せさるる事急あふるも及ひてはうもいとて御事

て鞆の前輪をくくせめあも血流き出て出るうくの事幾度ともあまき故ともあり

○東照宮金の七本骨の扇も日九付々々馬印ハ参河の設樂郡牛窪の牧野半右衛門があらしを永祿六年も乞得さ

せしめて馬驗とありあふ夫より前の御事ハ厭離穢土欣求淨土の八字を書きしりて大樹寺の登譽が筆ありその

ある明曆丁酉の火災もうきりといひ然るも扇の御事ハ其前よりの事や天文十四年公矢矧川も織田

家と軍有り時利ありて危うりし本多吉右衛門忠豊とて岡寄り入らせめ御馬驗を賜われ討死まじべしと仰せしる

許さるる扇の御馬驗も取て清田殿もて討死し其

ひまゝの危きを適きぬへり御ある一々忠豊が嫡子平八郎忠高の家も相傳へ忠高も又戦死し其子忠勝が時に至りて永祿二年東照宮乞返させぬひと云り

○加藤肥後守忠廣或夜物語も吾ハ大力ありと思ふ重き甲二領重祢軍より出バ恐る事ありと云きを飯田覚兵衛はりと聞き先殿物具一領より數十度の戦終り手負せりけり朝鮮も攻め入りて鬼將軍と異國の人も惶も死生存亡ハ天命にて人力の及ぶべきもあざむくべし能戦へバ生惡く戦へバ死ると事もい國中の民を撫育し諸士よくあつぎ従ふ時ハ席上より勝敗の理を論ト軍兵を下知りて進退自然も整ひり人バ三軍の着たる物具ハ皆大將の

一身も重ね着ると同ト事ありと云き鋒を争せん臣ハ力を好ませぬの事然るべしと存りけり退しけり時先殿もいりけり声をおびて泣くるとぞ此覚兵衛ハ清正の時武功の大將あり初ハ角といふ字ありし太閤覺の字も書替させしとぞ覚兵衛云ひけるハ我一生主計頭も初で軍も出て功名も時朋輩多く鐵砲も中りて死しけり危き事よそ也是まかりて武士の仕へしと物ひきも帰るやいやは清正時をすさげ今日の働神妙しんるあはれとて刀を賜りき斯の如く毎度其場を去る後悔されども主計頭其時をうらさげ陣羽織或ハ感状を

人々もその美としてありては、其のひらきや
む事を得ず、麾を取士大将といふも、主計頭も、これ
て本意を失ひて、忠廣没落の後、京より引籠り、再仕
を求め、時語りたる、時語りたる、と云ふ也

○前田利常大坂の軍も功有て加賀へ帰り討死し、士_の為_は
よて報恩寺といふ一字を建立し、戦死の人の追福もせよ、自
ら彼寺に詣り時討死の士の親族を供り連らせ、自ら香
を焼決し沈みて深く悲ま、を見る人聞て人此殿の為に死
ん事露塵汁も惜く、一同に哭り泣く、と云ふ
○慶長十九年黒田孝高入道如水病重く成て子の甲斐守をよひ
汝の親も事有我も、汝の事二つあり

語て聞せん今我死バ我士ハワのや及ぶ汝が士大将より士
に至るまで悲まあが、へー汝死して我あがへ、と云ふ誠大
あるま、如水おち、力をあはれ、
士有るべく、是人のあがき従ひて吾も服する事汝も勝る
其一つあり、次は我ハ無双の博奕の上手あり、関ヶ原よて石田
今あがき支へ、バ筑紫より攻登り下部のつゝ勝相撲も
入りて日本を掌の中握んと思ひ、き其時ハ子あり、汝
をもす、一となく、又紫の袂も
包くる草履片足、木履片足取出し、軍ハ万死も入て一
生もあふ習ひあり、十全を思慮してハ叶ふま、ト云ふへバ
草履木履をまき、二つりのわらの軍をまき心得

せきよ汝ハ才智有りて先の事を豫め料る故ハ大功ハゆ
めく叶ふまじく儲めんづと云ふ物ハ飯を盛りの上天子より
下百姓に至るまで一日に食物をくつて世にありらる者
ハあき事あり國を富一士卒を強うするの根本一大事此飯入
るあり必まじくべうづる故ハ此のめんづをくつてよ参
らぬといふれり

○加藤嘉明関ヶ原の戦ひハ大功有り一ハバ五十万石を賜る
べき處ハ本多正信其事をわしとめたりと嘉明傳へきて
本多を恨まれり正信行き一ハバ願ふ處とて對面せ
る正信の曰大國を賜ふべきとあり一ハを我然るべうづるは
を止めり是忠ある子細のハ其子細ハ御身ハ武勇智謀

とひ稀ある人よ又豊臣家の恩深一人の疑有るべ一功成
名遂て身退し事のみ今領國の少きハ柳の恨ありおきん
ハ恩遇子孫ハ到らん若大國を領一ハ必ま人の後より
む人ハあはれと世疑ひおきて禍あるべ一と存る處あり去
ども恨らるんハハ力ありと云ひ一ハ嘉明詞ありて止
り

○安藤帯刀直次物ぐるの時本多上野ハ正純ハ家亡おへき
りと云ひ一ハ程あり本多ハ禄を賜りたり人々直次ハ志外
しとれしハいふと問ふ直次聞て後を見らるしと云ふ又下
野の宇都宮二十万石を賜り人々又直次ハ我等兼りハ處へ
くるしハいふに再三くる事ありしと云ふ直次打笑

ひ正純家亡ん事近きありとゆやぐて正純國を召放とれ
 しく人々又直次一神智有るが如くもいひつらある故もやと
 問直次さきばとよ台徳院殿関ヶ原の軍の時木曾路より遅
 留の有りを正純是るる父正信が仕じさし死罪を行ふ
 るが嗣君の過多き事を人存むべきよりヤせを台徳院殿
 我為よりくまが云ひつらと仰せしき由正純聞て巴が功と
 思へり父を死罪よとゆる三千の刑不孝よまらる事や
 此家の亡ふべき理ありまると忠を君よとすハ誇るべき
 事もあはれ正純の亡ぶるつと遅くりきとぞいふまじかる
 正信よ三万石の禄地も賜りし時臣ハと鷹師もい
 をうやう小取立ちきりハ只今の禄分よ過たり必天の冥

○

加る盡すべしと固辞せしが其後子の上野ハ我ありん
 後汝も禄をすしなわりあるを三万石ハ我も賜りしをば
 辞まぐりてこれより増賜りあるが必を固辞まぐり禄の
 身も過るハ禍ありと遺言せしけり正純父のをいふ
 背き終る國亡びたりとく
 台徳院殿ハ殊も禮儀正しくねしきま苟も疾言なをいま
 され事ある時ハ泥塑人のごとくもあんと人の中せしが極めて
 下民も御心を盡させぬひ孝道深くあしりまはつら又信を
 失ひてハ天下保ちがごとしと常も仰せらる御鷹狩も出ぬふ
 時も時を定めし御膳の半も辰の鼓をうてハ箸を捨て
 出ぬ近習の人奉膳終らざれば辰の太鼓をうてハ井伊直孝

是を聞近習の人々も向ひ是君を愛すると思へるハ大なる
るひが事々々々あれ君正しき道を好む事々々々汝も
も正しき道も仕へられよやうも事を料らぬ人必々阿
諛を好みて寵愛を好む事々々及ぶべしと膳を奉りて
鼓の前終りある何の苦しきことやある是等ハ誠ハ小事
あまじき君を欺く事々々君子ハ禍を未然に防い
ゆのありと戒めし事々々

直孝ある特林道春ハ物語して樊噲が勇氣とてまきと聞く
さきさきハ弓箭取の珍しき事もあはれ我もさきさきハ
立べくはとつれハ道春會ハ誠ハ穢多の子も筋目
ゆきさきハありさきさきハ愛ハ一つの故のハ戦ひも臨みて

○

矢石の中も先掛するの事を勇氣といふは是ハ匹
夫の事ハ噲が顔を犯して高祖を諫めりせし事有り足下
もいひていひてき廣言をききぬともよあり身ら省らま
よ噲も及ぶぬ事の有るべきといふハ直孝恥る色あり是ハ
其比大猷院殿御病氣とて大名も相見ありり故ハ斯いれ
しとや世も道春一生の格言とせり
惺窩藤斂夫東照宮の御前にて秀吉ハ大膽なる人あれども
大心ありといふべし朝鮮より明へ攻め入るとハ大膽
あれども秀信を信長のあつてハ仰ぐまじ自立して日本を
掌握せしれハ大心もあはれとてさきさきハ後ハ此事を四
辻亞相公理卿もくくも人あり亞相の曰くこれハ其論尤あり

と思ふ大佛建立ハハの猿いころがまゐれぬありとい
されき

○紀伊大納言頼宣卿ハ東照宮の十一男にておまゝませ
ガ幼き時より東照宮の膝下におまゝして文武の御物語を
聞一召一尋常の質もなまゝにまゝに諫を納めし事もな
まゝに或時腰帶とらふ備前長光の刀にて立なきを試
みるに快く切て其まゝ立なきをつまひひきせび二つ
成て倒れたり左右一同も驚入をうりあり大に悦て那波道
圓も異國ももくる利劔もありや又り手のみきくも人
やあると仰せ有りし道圓兼り異國も龍泉太阿もど
中利劔も有之い人を殺して樂む人ハ夏の築王殿の紂王

獸のまゝに悪王かきまゝに九人を害しけ面白くかよハ禽
獸のまゝにさぐりて人間もてハあゝ日本も罪人を切ハ穢
多しをいへへと憚る色もくひひつと入のひぬやぐ
道圓を呼て先下中へつる處も至極の道理ありて
再び自ら試す事有るまゝに諫言も返りぐも淺くも福と
賞美ありたり又ある時大高原左エ門とつふ士も司る事
付て目も不幸もく良き士持がゆゑ何事もおろろり
成ぬくまゝりて人のあきくと有りしを道圓聞て巴目
らくて人のよりあを見明めざるを咎めむて人
まゝに何事ぞや外様古参も新参もよりき人を撰て出さ
んも智者も勇者もいりあども有るべきよ人のあきくも

目の明ぬ故に直言しつゝをばくくしと聞かひ道理至極せり
 とく再三感ぜられ深く先の詞を悔えぬひくくしとく道圓常
 り其子もくくしとく乱世も臣士君の為る死する事有り太
 平の世諫て死する事を忘るべしと戒めたり

○

慶安四年 辛卯四月 二十九日 大猷院殿過させらひく其七月江戸より浪
 人由井正雪叛逆をくくし紀伊大納言殿の仰せし稱し判形
 を似せ謀書を可々遣し九橋忠弥芝原又左エ門以下數百人
 徒黨し御鐵砲の藥藏の奉行川原重郎兵衛も是と與し埋
 火して遠くより火をきく徒黨の者ども船して海上に出る
 時藥火を移し江戸を一時焦土とあきんと巧く心替し
 三人有りて訴へ出あはれ九橋を

生捕せし正雪ハ駿河宮の町にて自害しつゝ右の謀書を
 數通浪人どもの許り有る故大臣集りて一大事と案し煩ひ
 頼宣卿を殿中へ召て此書を出外有るへく其時
 様子ありありあんと直に捕へせしめたる兵を
 置いて出仕を待居たりし尾張中納言光友卿水戸中納
 言頼房卿も出仕有此事を告げたる尾張中納言何條りる
 企有るへきや是謀書にてあんとありし水戸中納言もい
 り左のいあんとを宜ひたるされども各手汗を握る處
 り頼宣卿出仕有りて座り付きのひし井伊直孝酒井忠勝
 松平信綱此度浪人どものく次第を述べたる處に阿部
 忠秋の状を披露しつゝ頼宣卿残らば見多ひて氣色うら

とて返さくも目出度くそいへりや何のゆゑも事ゆひつ
 其子細ハ彼の徒黨の面々外様大名の判を似せ謀書を作りこ
 らんよハ三代の御恩を忘れしや氣ちぢひて謀反を企するとの
 疑も有るべきよし我等が判を似せしる事故あり治りしるあり
 幼き公方の御身も御疑ひもあらんよハ我等只今國さ
 ー上げのりも仰せも従ひ奉るべー天下安全もてこそあれ
 と悦面もあつて見へしを兩公をそとめ一同に感上言
 ぬ人もあつりければ頼宣卿其浪人どもの中壯年の者四五人助
 け置きし重祚詮義有るべき為ありとの後ひくるとぞ
 頼宣卿紀州より松江の西の庄とつゝ處も鷹狩ありて湊上
 船を付陸路を經りし折節春の夢を遂るありて儻上

路明より皆農民の年中の糧あるぞ供の者ふむづら
 らばと再三制して歸りぬひくさハ百姓ども悦びあへり
 を供あり横目の長臣の前へ参りて次第よいと申
 何事も感トあひくさハ水野淡路守重長一人今日殿の御ふ
 まひこそ心得給くる事故下々の奴原殿の内曹を見て馬鹿
 さるごとく殿の通らせぬらんハ夢を脇へ引きのけ水を打
 てこそ有るべきよ何ぞや夢をあつて通路をさく事奇怪
 あり一國の主の仁ハさハ無きものありとつひを頼宣卿聞
 きぬひくさバ君も君より臣も臣よりと人々ヤヤり
 頼宣卿馬を乗ぬひ駈の中より頭巾の風も落くるを中よ
 取て又鞍を乗直りぬひこそ吉見喜右門とつゝ者松野惣太

郎とつふ者も語りたり折節頼宣卿馬場におちりける時
る一惣太郎聞き殿のいまご馬場の練ゆつねありといひ
くまの頼宣卿子細いづらよと尋ぬ惣太郎さん東照宮ハ
海道一番の馬上の御名人と申奉りけると兼り小田原陣の
時山道を武者押して過させぬ丹羽長重長谷川秀一堀秀政
峯筋をわたりける東照宮の御旗を見て皆々お前を觀る爰
も一つの谷川の細橋有り此橋へ行きける人々橋の下を皆歩
まゝりみれば東照宮馬上より橋際へ着せりひりける三人の
大將聞ゆる馬上の達人の細橋を渡さる見よと云ひあはり
くまの馬より下りぬ御馬の遙の上を口つき四五人ありて
牽渡りたり人々是はつらと云ひたるをうの三人の大將

大に感へ馬上の達人といふ是をこそわづらへけれ馬上の達人ハ
危き事ハせぬものあり殊に大事の軍を前子置ての事をま
はくく有るべき事よと感へたりと兼り傳へりて中をさぶ
頼宣卿はくくと聞て大もよろこび其詞を書て硯箱に入れ
らまゝり又前田權之丞といふ士ある時頼宣卿へいひたるハ
今朝ひとり思慮せる事のいひしも大將の一言不ど重き事
はらまゝ千金も人の命を替るものハ有るまじき事大將
の一言より忽命を露ちり計もなき事存る事を
きハ昔通りの事よと申さればとての詞あはて時服
をあはれぬひね

○京極刑部少輔高和播州龍野を領せり國用甚乏りけ

公儀の事ハ堀田若狭守ノ計リ藤堂大學頭高次高和の長
 臣岡七郎兵衛定次相加リ評議一新参の士小年を限りて永
 く暇を出しべしとの事あり佐々九郎兵衛長光年老ぬまとの
 思慮ある者トク呼まされば江戸へ行き藤堂堀田ノ相會に
 評議の始終書記して佐々見するは是ハ存寄ざる事あり是
 非新参の面々ノ暇を出して賑ざるを足んとあはぶ禄多き者
 然るべしとくちま佐々一人ハ禄數十人より多し流浪すとも
 さのミ艱難も及ぶ小禄の人々ハ道路ノ乞食せん是不仁
 の至りて行ふべき事ありあはぶ論ぜらまよと諫む佐々
 が思慮を問はるる高次五百貫目を取次て貸まらんといふ五
 百貫目ハ臣帰路ノ京ノ借求ん爰も一つの大切

の事あり幾度くも殿の能舞妓鷹狩屋敷の設衣服器
 物萬事ノ費をあり國の長臣其職も在るもの身がまへしてあ
 ら何の益もあらん此の諫言ハ外戚といひ大禄あれば高次
 の任あるべしといふより一座感とて佐々言を用ちひ暇
 を出さざる者一人もあらず長光定次も向うひて此事を
 一旦評議も及ぶとも國の長臣として猥も順從して一言も
 争つべ不忠あり世の國の長臣とある者其身の饒あるを省む
 尚貪る心より其主君も諛ふ古より軍も臨て死するハ多々
 諫て席上も死する者ハ勘一成難きをありをすべしと
 何ぞ諫めて死せざるべき大くと財用の乏しきも及びよ
 その金銀を借求めり忽困窮も至りてハ士の禄をせざる

り約束の詞を違へ非義不道の事を申し行ふるも成ぬるぞう
 常る儉あぐ足ざるも及て俄に患るとも其本正しくも
 武備を全うせんとおもへどもいつで事よく成べき君臣と
 も國郡を盗と禄を竊むの凶賊あるも其恥べきを耻とせ
 ば是非あき事あぐや汝其職に居てくる心あきいつ
 ほといついで定次一言の答もいつりたり
 ○加賀中納言利常の士不破彦三四千石の禄を受て武名を知ら
 せしむり其子も同じく彦三といふ性質愚鈍に見えて常る怠
 ちある事多し是を諫る人有て時節といふ事有りといふ悦
 入りぬといひあぐ聴用するも見えざれハ又いつか
 ころ其時不破あぐ笑ひ才覚ある御身五百石我愚あれど

も四千石さのとも誹られぬといふ色を羨し人の膝
 る劣る禄の多少もよるべきや何とてさあど理の不通あるぞ
 とつふ不破も我も知りぬ今の詞ハ戯あり亡父常も我
 を誠めて小ざうき利根どてある事ゆゑさぐべ人
 の心も入らんといつりそあも諛の事有るべく唯守る
 べきハ義の一筋あり汝武勇の身あり士の義を忘せざれ
 とつあきといふ違をんうと日夜是を勤るの外他事
 あり衣食の美を好まば従者と艱難を同くせり日本第
 一の大家ある加州の士中我と禄同トき者多しといふ見
 らしむ人馬のすくやうある武具の揃ひ整ひたる我も
 勝る者有りとも覚えざり又利もさよりたる事やあ

この諂ひたる事や偽をやる事や平生日々身も省きて
弓箭の家も生む職をゆるうせよせ御身へ亡父と親
き入あり一故う諫うもつる事も忝くよろこび存るあり
されども正しき道も教へぬるべきも只時を見て世も從
へとも實の本意も非るべし言も從せし本意も
從ん如何らんと答ふも諫一人大も心服し

○

井伊直孝大坂冬の軍も物見二騎を中るも雨も濡て歸り
則着らる小袖二つを脱てあらくらきり叔安
藤帶刀の許より小袖をもひ島の小袖革袴もて兩御所の
御前も出られたるごとく直孝の領地近江の彦根へ湖上より

船を泛ぐり都も行くも甚近し太平も及てや奢靡の風俗
ありて彦根の士も都近ければ衣服美麗もありたるを
直孝戒めしし儉約もすべき道をせり江戸より歸る
時木綿の衣服を供する士の數密も用意して彦根も着
く時俄もらるり着せられり彦根の侍衣服をもど
りて迎へたるも供の士皆木綿の衣服あり彦根の人々身
を省て美服を裂くありとぞ一事の法令をも出さば彦
根のおごりやまてり

戦國の時衣服質素なる事論ずるを待て滝川左近將監
一益関東の管領とて厩橋も至る時諸將對面の為来
りし只今一つ有る衣服の垢つきたるを濯ぎて赤鞆も

てい程も暫く待ちてぬらまじとひひ事語り傳へて直孝
 の衣二つ物見の士もあつて着替のあつて皆符合
 して泰平も及てや衣服の美も成つて寛文の頃
 まだ尚其遺風あり然るに金銀利倍の物語する事ハ
 士の恥と心得居たり酒井雅樂頭忠清大老とて
 時江戸の殿中より春の末もや休所より下も着る服の
 汗つぎを欄干よりけり所々つぎをけり見
 づるしきと歸りて語らむも其事を司り老女の
 時移りて君の奢りありも一生の今の如くあり
 んといひ事あり此事ハ嚴有院殿の御時あり古の
 武士ハ大やう無用の奢侈を縮めて用ふべき事あり客

あつてあり関ヶ原一戦の後成瀬吉右衛門ハ伏見に在り
 其子隼人正駿府も在り折節父の許も金を贈りけ
 り居間の天井も釣置て客来まじあき見ぬ者を調味
 せよとて隼人が贈りける金あり是を見ぬを美味も
 勝もりともぐりたる大坂冬陣和平の後隼人が子
 何某祖父の所も来りければ此度の事故もあつても
 やぐ事あるべし其時よき馬をりて江戸廣くと
 して金二拾枚の馬ハさの多うとねをとりて二
 人の孫も各金二拾枚をあつて昔の士風想ひ
 見るべきや

○永井信濃守尚政も執政の職を仰せ出さし時井伊直孝

○ 對面一不肖の身うる。任を受甚恐懼も及び以教訓を得て其職も居ひやとやされけり。直孝尤の事も我をへやべり身を潔く。明朝来らむと有り。れは辱きあり。ひて沐浴し禮服して其明の朝行り。直孝出あひて世の諺もゆらん。大敵とや。事定めて知らむ。べり万事の危きも及ぶ事皆是也。らんより破る事のみ。此事く。忘られむ。し。れ。り。青蓮院の宮も。幼き宮も。中院内府通茂公後見。常も碁双六を制せ。れ。ある時公参られ。將棋の盤の有りを。見て家司坊官を招き兼てかせ。る。物を何と置。る。業ハ素よりあり。れ。

○ 有りて。年の長。心づきの有りて。やむ事もある。是等の類ハ。悪事もある。故其事。慣空。月日を過し。学問の志怠るもの。第一のあ。物。と。あ。れ。と。退出せ。又ある時其宮も参る。人尺八の名管を持来。り。重器あり。とて人々玩ひ。る。時公参りて。是。誰。が。業。ぞ。や。う。の。物。を。と。て。柱。も。打。ち。あ。て。く。碎。る。の。主。の。甚。重。器。と。思。へ。る。計。も。あ。り。て。い。ふ。小。せ。ん。と。い。ひ。く。も。其。主。来。り。事。の。よ。し。を。聞。て。誰。某。も。持。と。る。と。内。府。の。聞。し。召。ま。ん。事。恐。る。と。い。ふ。も。それ。と。あ。り。て。い。ふ。や。は。ね。ハ。大。も。幸。も。い。ふ。と。云。ひ。く。る。と。い。ふ。○ 松平伊豆守信綱出仕の時裏付の上下着る事あり。屋敷も有

是を着らむび常より人の心衣服よりて
 変に出仕し々恭敬を存せしめし忠を盡す事を得難し
 先衣服より心を付く々恭敬をすするべし我よわい
 へくくの如くつとめざれば忠勤を成しぐと云ふべし
 信綱實ハ大河内金兵衛元綱の子伯父正綱の嗣とある幼名長
 四郎と云ふやける嚴有院殿御誕生有り一時より御家人なる
 され御あそび相手もぞひひ々々大殿の御寢殿の軒も雀の
 巢をくひ子を産するを若君と云ふとより御覧じ長四郎
 よ取てまゐりせよと仰せらるる年十一歳ありふり
 うのふまじきよを中け晝ハ驚きて飛去もやせんよ
 見置て日暮てとあとの軒も梯きりて登り忍び行き

ともとありあふ人々進めくせむかあ日暮る忍ひの
 やりつとひ行きらるるがめ損して御壺の内もどうと
 大猷院殿御刀とせむひ障子ひくせむへ御臺所
 火とつて出させむひ御覧するも長四郎より有り大猷
 院殿汝ハ何ゆえ爰より来るぞと御尋有り
 晝御殿の軒もすむめの子産るを見余りのあ
 りも参りてふとやけりやく巴が心ハあ誰が
 くらぐとさあぐ御推問あきども幾度もあらそひぬ年
 比も似ぬ不敵あきむとて大ある袋の中へお入て口
 を御手づく封トむひ柱も掛させむひ事のみ有の
 まりやさげんあどりのあでもうてはと仰せられぬ

猶詞をくぐりて夜既るあけて常の御座を出させぬ御臺
 所ハ早く心得させぬひてうきうき幼き心よて身の悲しき
 を顧みて竹千代君の仰せありとやせざる事を深く感
 のひ女房とらふ仰せ有て朝飯をゆきとてくはくとて賜
 て入口を封一のひてくはり晝あど入らせぬひて又御推問
 あせどもつひよ其の詞屈せば御臺所御言ひ言あり
 うばさくば重てを慎りよと仰せ有りて御赦あり御臺
 所は向をせぬひて今心よて生立とらんよハ竹千
 代殿の為る双なき忠臣よてこそひんめと殊の外よろ
 こせぬひてとや和まざば諸國の大名の代々奉り
 人質をうア一殉死を禁一 大佛を鑄て錢とて明曆の火

災東都の城郭を始めとてく灰燼とあり諸人焦爛
 ろる一む殊る去年由井正雪の逆徒のさしとぎ有一後
 む人々心安るざり一信綱事も臨とてくち處
 り行ひし事皆其所を得てあどなく世の人心も静まり
 昔替らぬ時とありぬ事いり一の賢輔も恥べ
 らむとて傳ある處あり

常山紀談卷之十八終

